瞳の開く時

chihya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞳の開く時

【Ｎコード】
Ｎ７４８４Ｋ

【作者名】
ｃｈｉｈｙａ

【あらすじ】
シトラは少女看護婦。帝国からの攻撃を防ぐため地下に建設された町の病院で働いている。戦時下で生活は豊かでなく、仕事も重労働。それでも友人にも恵まれ、彼女はそれなりに幸せに見える生活を送っていた。
しかし、彼女には誰にも言えないある目的があった。
ある日、帝国軍の偵察機が近くの地上で撃墜される。その飛空士の少年は、捕虜としてシトラの務める病院に収容された。
秘密の目的のため、彼女はその少年に接近する……

プロローグ

はるか彼方の空から、鋭く長い音が聞こえている。

今日という日にも、やはり”鐘”の音は鳴り続けていた。

海は不気味なほどに静まり返り、大気は忠実にその音を伝えている。

腰と両手で触れている岩場も、表面をこするとすぐに崩れる。指先にこびりついた砂をそっと吹くと、簡単に飛び散って、あたりに浮かんだ。まるで埃のように、弱弱しい消え方だった。

”鐘”の音は、やはり世界のありとあらゆる場所を、余す所なく覆いつくしている。

それは鼓膜を引き破り、脳髄の奥まで侵しつくそうとするような、不快な響きだった。ただひたすらに不快なその音は、不快というだけで十分に人を殺す力を持っている。殺そうとするまでもなく、鐘の音はそうなるのが摂理だというように、易々と人を屠り続けていた。

もう何十年もそれが続いている、らしかった。

そんな音に聞き入っていれば――そう遠くない未来に、自分は死ぬだろう。

というか、いますぐに”鐘”の聞こえない場所へ行かなければならなかった。まだ、死ぬときではないのだから。

「よい、しょっと」

少女は立ち上がり、足や尻についた砂を払った。体がだるかったので、その動作も、大層のろのろとしている。

十分。

やはり、それが生物に耐えられる限度だった。”鐘”の奏でる魔の幻想曲のなかに、生身で浸かっていられるのは。

今日は記録を更新しようと、いつも以上に粘っていたが、もはや

ここが限度だった。
「ううっ……」
少女は、意図せず漏れ出たうめきを、止められなかった。
体中の骨が、あの岩のように、細かく砕けてしまうかもしれない――それは思い過ぎだったが、しかし全身の痛みは激しかった。ぎりぎりと、いやな音すら立てて腰や背中の骨がきしむ。
（ちょっと、やりすぎたかも）
夕日に照らされた、あの真珠のような海を見ながらでなければ、とっくに精神が崩壊していたかもしれない。そう少女は確信した。
いつか、あの海の中で泳げたら。
少女はまた、そんなことを考える。
いや、ほんの一瞬、手で触れるだけでもいい。
そこで感じられるのは何なのか。
生ぬるいのか、ひんやりしているのか。濁っているのか、澄んでいるのか。波の寄せる感触は、いったい何に似ているものなのか。跳ねる水滴は、輝いているのだろうか。潮風の匂いは、鳥の群が発する鳴き声は。
そんなことができたらと、何回まくらの上で思ったことか知れなかった。母なる海、命のはじまりの地には、ひょっとしたら、あの音を打ち消す力があるかもしれない。魚のように飄々と海中に潜れば、何もかも忘れられさせてくれるかもしれない。
（やっぱり無理な話、か）
現実には、”鐘”の容赦のない断罪により、あらゆる水棲生物はその数を激減させていた。音の届きにくい深海には、わずかに生き残りが居るという。どちらにせよ、人以外の生き物は、ことごとく遠い世界に旅立ったというわけだった。
少女は盛大にため息をついた。やるせなさに、肩がガクンと落ちる。
憎しみを感じられるほど、少女は気丈になれなかった。ただ、胸の奥から何かが消えていくような、空寒い感触を覚える。

彼らには何の非もない。責めを負うべきは、すべてあの”鐘”のほうなのだ。
少女は恐怖に抗って、視線を転じた。
遠い空に浮んで見える、巨大な円。
赤く沈もうとする太陽の傍らで、ますます存在の領域を拡大していく、もう一つの星がある。
帝国軍の惑星兵器。
月と同様、自分自身では光を発していない。その星が持つのは、太陽の光を受けた、かりそめの輝きに過ぎないのだ。しかし、あまりに質の異なった不気味な光を放っているように、どうしても感じてしまう。
「あんなののせいで、わたしの故郷は……」
少女は一語一語かみ締めるように、ゆっくりと呟いた。そのようにしたのは、あまりの痛みに筋肉が引きつったからだった。
”鐘”と呼ばれるその星は、まったく動かないままそこにある。それだけで、なにも破壊をもたらしているようには見えない。ただ、生き物の命を猛烈に吸いとって、力を増していくように見えた。黒みの混ざった朱に染まっていく世界にあって、”鐘”のみが輪郭をはっきりとさせている。
一方で、少女の体は疲労に蝕まれていた。膝ががくがくと震え、座り込みそうになる。
しっかりと立ったままで、鐘に一瞥をくれてやることすら、まともに出来はしないのだ。
少女は、髪の毛の奥がかっと熱くなるのを感じた。その熱さをどうしようもなく、ただ実用的に呟くということだけをする。
「さてと、早く帰んなきゃ。みんなが心配するし……」
ふらふらと揺れる体をどうにか制御しつつ、少女は振り向く。しわの寄った服を撫でて元に戻し、スケッチブックの入った鞄を肩に抱えた。
海に向かって一言だけ付け加え、足早に歩き出す。

「またね」

そうして少女は、歪んだ地上を後にした。一つの感懐だけを持ち去って。

前編

沢山の薬品と包帯の山が、手押し車の上に載っている。時々それにちらりと視線を寄せつつ、少女は伝票とにらめっこをしていた。

それは、痛んだ体でも楽に出来る仕事ではあった。しかし、普段の重労働と比べれば、の話である。２時間も席を立たずにいれば、さすがに肩と腰にくる。

「ええっと、バナンカプセルを東病棟に４０。アストニン液を３０……で、要冷凍、と」

医療に用いる様々な品が、きちんと搬入されているかチェックする。そして、何をどこに送ればよいのかをいちいち書き付けていく。

面倒かどうかはともかく、地味な作業であることは確かだった。常に見習い看護婦に回される雑用とはいえ、病院の機能を保つのには重要な仕事だ。

よって、少女は真面目に取り組んでいた。だが時を経るにつれ、背中の引きつりがいよいよ酷くなっていく。少女は、ついに立ち上がった。

「ふぅ」

労働の鎖から解き放たれ、少女は息を吐き出した。

狭い部屋なので、大して手足を伸ばせない。だが、いつものようにいちいち廊下に出て、道行く患者や看護婦に健康的な体操姿を披露する気分ではなかった。

首、肩、腰と、思いつく限りの部位を動かし、疲労感を飛ばす。最後に、目玉をぐるぐると回して、再び仕事に戻るつもりだった。

「あ」

その時、椅子の上の鞄が目に入った。少女の私物である。

ふと思いつくことがあって、少女は鞄を膝に置いた。入れ替わりに、少女が椅子に腰掛ける。

「お……っと」

看護服の袖が、薬品棚にひっかかった。慌てて外す。
その間にも、左手が目当てのものを探し当てた。
それは、表紙の汚れたスケッチブックだった。細かい砂のようなものが少なからずくっついていて、表面に触れるとざらざらする。それでなくても、もう何年も前に買った物なので、全体的にしなびて見えた。
砂を拭い去ってしまわずに、少女は紐を解いた。表紙を一枚めくる。
そこにあったのは、これまた褪せたような紙だった。しかし、その紙に描かれた景色は、今でも色褪せずにはっきりと思い出すことが出来る。
「海、か」
囁くくらいに小さく、少女は独りごちた。
何年もの間、描き溜めてきた海の絵たちを、ぱらぱらとめくって眺める。
いつもの岩場から見た平凡な海や、砂浜の方まで遠出した時の鮮やかな海。特に、荒れた天候の時に写生した、陸地をさらっていく波濤の偉容は忘れられなかった。自分も海の中に飲み込まれてしまうのではと、おっかなびっくりしていたた。だから、少々ゆがんでいる部分もある。
病院に来てから描いたもの、それより前に描いたもの、など様々な絵があった。
黒鉛筆で描かれた波が動き、砂がざわめく。なかば夢想しながら、少女は絵に没入した。
動いている部分は力強く濃く、静かに止まった部分は柔らかくしなやかに。いくつもの線が交錯し、どの絵も全体として、生き生きとした海の世界を紙面に再現している。
それらは決して忘れたくない、大切な景色だった。もう何度も見返したので、絵の様子は細部に至るまで脳裏に焼き付いている。
少女は半分、海辺にいるような気持ちだった。思い出に浸りなが

ら、じっと座り続ける。窓から入ってくる風は、無機質に乾いてはいたが。
絵の上を手で、優しく撫でる。紙のざらざらとした手触りは、小さな粒に似ていなくもなかった。指先を見ると、黒い炭が少し付いている。
「今度は、いったいいつ行けるんだろ」
海上を行く帆船のように、思いをめぐらせながら、少女はため息をつく。

そうして、少女が目を閉じかけていると、ドアノブを回す小さな音がした。
一度身震いしてから、少女はドアに目を向ける。ちょうど、少女の同輩が部屋に入って来たところだった。
「やっほー、シトラ」
見習い看護婦が、帽子を小脇に抱えて声を発する。ブロンド色の髪を揺らしつつ、兵隊のように敬礼の姿勢をとった。そして彼女は、後ろ手にドアを閉める。うずたかく積まれた薬品や包帯の固まりを、意外そうに見やった。
「どう、体は大丈夫？」
「えーと、ま……なんとかね。わざわざ様子を見に来てくれたの」
シトラは嬉しくて、同輩に向かって微笑んだ。
彼女は、同じころに看護婦になった友人だった。フリュクテという名前だ。
フリュクテは思案げに、シトラの顔を覗きこんでいる。
すると、彼女はさらに顔を近づけてきた。
「そうよ、よかったら感謝してちょうだいね」
フリュクテは可笑しそうに、手を口元にやった。そんな彼女の姿は、花畑のように鮮やかだった。
「うん、ありがとフリュクテ」
と、そこで止まるのかと思いきや、フリュクテはなおも顔を突き

出してきた。彼女の細い瞳が、シトラの視界をどんどん埋めていく。
「？」
訳がわからず、シトラは目をぱちくりさせた。
ついに、フリュクテの額とシトラの額とが、こつん、と軽くぶつかる。紙一枚、すきまに入りそうにない。お互いの頭蓋の硬さが、直接にお互いを感じさせる。そんな距離だった。
こちらの目の中までも見透かすような調子で、フリュクテは言った。
「ほんとに大丈夫ー」
間延びしたような、からかうような口調で聞いてくる。
フリュクテがふざけていると知って、シトラは軽く吹き出した。
フリュクテの肌に直接伝えるようにして、シトラは答えた。
「朝ごはんもたっぷり食べたしたし、もう元気いっぱいよ」
それを聞くとフリュクテは、さっと額を離した。そして、じんわりと温かい手の平を、シトラのひたいに押し当てる。
「うーん」
と一声うなって、さらに、
「たしかに熱はないみたいですねぇ」
右手で人の額をさすり、フリュクテはあっけらかんとした表情で言った。まるで、小さな幼児の患者に対するような言葉遣いだった。
そんな彼女と、シトラは一瞬目を見合わせる。
そして思いがけず、盛大に笑い出してしまった。シトラを見て、フリュクテも我慢できなくなったのか、一緒に笑い始める。
病院の一室は、つかの間の華やかさに包まれた。

院内食堂へと続いている通路で、フリュクテは向き直った。
どこか打ち沈んだ空気を、隠し切れない。それでも今の時間帯、廊下にはたくさんの人々が溢れている。事務的な表情の医師に、そ

れを焦って追いかける看護婦。ギプスをはめてはしゃぐ子供もいれば、ゆったりと病気とともに歩く老人もいる。
それら、物語るに事欠かない人々には、窓からの光が等しく降り注いでいる。そんな光を吸い込んでか、フリュクテの瞳もどこか、液体のような輝きを帯びていた。
「でも、シトラって時々寝込んじゃうのよね」
「うん……ごめんね、迷惑かけちゃって」
シトラは、少し顔をうつむかせながら謝った。
それは、ただ単純に言ったわけではないのだが。フリュクテはあくまで、表面上の意味に取ったようだった。
「あ、そーいうことじゃないから、気にしないで気にしないで。こっちだって雑用を押し付けちゃったわけだし」
シトラが、なかなか顔を上げないせいか、フリュクテは慌ててなだめる。
だがシトラは、頭の中に引っかかっていることを吐き出せなかった。返答に迷い、無難に一言返す、
「うん、分かった」
するとフリュクテは、何かを思いついたように口を開いた。まじりに何本か、浅いしわがよっている。「ところでさ、シトラはもう知ってる」
「なあに」
一度、きょろきょろと辺りを見回してから、フリュクテはシトラの耳に口を近づけた。
「昨日、病院の近くに墜落機があったみたいなのよ」
「ついらく？」
よく意味が取れず、シトラはそのまま復唱する。フリュクテに目で聞き返すと、彼女はじれったそうに髪を揺らした。
「だからぁっ、飛行機が故障を起こして落ちてきたわけ。近くの地上に」
「あっ、そうなの。それは大変」

フリュクテは大きくうなづく。
「そうなのよ。飛行機は完全に爆発しちゃったみたいで。シトラは、昨日は寝てたから気づけなかっただろうけど」
「あ、うん。たしかに、疲れて一日中ふとんの中にいたし」
杖をついているおばあさんを避けながら、シトラはそれを思い出す。昨日は動こうにも、とても動けなかったのだ。将来の生活について深刻に悩まざるを得ないほど、体が痛んだ。今はどうにか、歩くことは出来たが。
「無理ないわね。でもみんなすごくびっくりしてたわ、こんな所まで飛行機が来るなんて」
シトラは、ふと脳裏によぎることがあった。
「え、もしかして、病院のじゃ――」
「しっ。あんまり大きい声で言わないで」
フリュクテは人差し指を口に近づけつつ、シトラを制した。通り過ぎる人々に聞かれていないかどうか、辺りを見回している。
「そうだった。……ここで話さない方がいいかも」
「ん、そーね。続きは夜にしよ」
そのときシトラは、フリュクテの深刻な顔をあまり見た覚えがないことに気づいた。

看護婦というのは、あまり楽ではない。
四年にも及ぶ教育を受けたあと、ようやく医療の現場に出してもらえる。そして、そのころの熱意はいまでも変わらない。しかし実際の仕事は、当時に予想していたより、はるかにきついものだった。なんといっても、肉体と頭脳の双方を酷使する。なので、体全体が満遍なく疲れるということになる。
昨日は調子が悪かったので、重労働は免除してもらった。それでも結局、備品の点検だけで一日が終わったのだった。
「よし」
一方、今日はもう体の痛みも取れている。シトラは、いつもどお

りの仕事に戻ることとなっていた。あまり眠れず、多少眼が重たくはあったが。
それでも、病院中を走り回り患者や医師の用を足す――そんなことくらいは、軽くやれそうなほど元気がある。
「朝４時半起床、もんくなしっと」
言いながらシトラは、寝巻きを寝台に引っ掛けた。入れ替わりに、洋服掛けから真っ白な看護服を抜き取る。それが宙でひるがえるのを見るのは、洗濯物が乾いた時のように気分が良い。唇のはしをちょっとあげて、シトラはひとりで微笑んだ。得心の息が、鼻から漏れる。
着替えながら、彼女は思った。
シトラは、看護婦として生きることが好きだった。やはり、とても満足している。たとえ、つらいことがあったとしてもだ。
患者の笑顔をみることは、どうしたところで心躍らせるものだった。自分がここで働くことで、その笑顔を作り出したとなれば、なおさらだった。
時々抜け出すことに良心が動くこともある。だが、それは日々の労働の中に忘れ去る事ができた。
（ま、しょーがない、しょーがない。今日も１日、がんばるぞ）
拳を力強くにぎって、腹の下に気合を入れた。
純白の衣をまとった自分に、改めて新鮮みを覚える。それも、限りなく繰り返してきた毎朝の習慣だった。
そして、もう一つ。
もっともたいせつな習慣を果たすため、彼女は扉に手をかけた。
「いってきま～す」
幾人かの寝顔にむけて、シトラは囁いた。
同室の見習い看護婦たちを起こさないよう、泥棒のようにそっと部屋を出る。
搬入口の外には、広い離着陸場がある。

それを横目に見ながら迂回していく。そうして彼女は、目的地にたどり着いた。
そこには、大きな樹が一本そびえ立っている。いったいどういう種類の樹なのかも知らなかったが、見慣れた樹の節や枝の張り具合をみると、シトラは落ち着いた気分になった。
「さて」
胸ポケットに収まった、携帯用端末に手を伸ばす。電源を入れると、朝の清麗な静けさのなかに、間延びした男の声が響き渡った。
『おはようございます、今朝も無線体操の時間がやってまいりました。今日はサーンレッタ県インペラトル地区のみなさんと一緒にお送りしています――』
シトラはひんやりとした空気を頬に感じて、目をつむった。冷気が皮膚の内側まで染みとおり、とても気持ちがいい。ここにくるといつも、彼女は何も気にすることない時間を過ごせるのだった。
『――それでは、いってみましょう。第一体操っ』
とてつもなくのんきで、軽快な音楽が流れ出した。シトラの意思とは関係なく、音は空気を満たし始める。
まだ眠気の残った眼を、赤くなるほど何度もこすり、シトラは無心に体を動かした。

「あれ」
さっそく仕事を始めようと、足早に廊下を行く時だった。
並んで歩いていたフリュクテが、ゆっくりとシトラを指差した。
シトラは立ち止まる。
「どうかしたの」
問うと、フリュクテは寝ぼけたような顔をして答えた。
「シトラ、帽子をかぶってないみたいだけど」
「えっ」
すぐに両手を頭上にやり、看護帽の有無を確かめる。触れるのは自分の髪ばかりだった。彼女の言うとおり、いつもの帽子がなかっ

た。
「あらら」
言いながら、シトラは窓を見る。
向こう側をのぞけないように、加工された硝子。その表面に、看護帽をかぶっていない自分が映っていた。卵のように丸い癖のある髪の毛が、あらわになっている。自分で見てみても、だらしがない。また、もともと小さい背がさらに縮んだようで、しまりもなかった。
どこに帽子をおいてきたのか、見当がつかない。
「ちょっとちょっと……いったいどこに忘れちゃったのかな」
「うーん、部屋においてきたんじゃないの。まあ、後で取りにいったら」
首をかしげながら、フリュクテは言下に答えた。
「でも、あれがないと気分が出ないのよ。ちょっと戻って見てくるねっ」
と告げ終わる前に、シトラはくるりと半回転した。そして、小走りで駆け出す。

「おかしいな。やっぱ、あそこしかないか」
どこにも帽子が見つからず、シトラは腕組みしながら歩いていた。部屋や、体操した場所にも一度戻ってみたが、看護帽は見当たらなかった。
ありそうな場所の中で、残っているのはたった一つ。
一昨日まで、シトラが患者の身分に転落して寝ていた部屋だ。幸い、その時はほんとうの患者はおらず、自分の情けない姿を衆目にさらさずに済んでいた。
（確か、開いた病室だったし。まだ、誰も入ってないよね）
不安を覚えながらも、シトラは立ち止まる。
目的の部屋にようやく着いたのだ。
仕事を始める時刻まで、そう余裕はない。シトラは焦って表札を見た。

（う、うそっ）
真っ白だったはずの表札には、いつのまに入院したのか、誰かの名が1人記されている。その部屋は大部屋だったが、たまたまなのか、たった1人しか入っていないようだった。
（恥ずかしいな～、こんな朝早くから忘れ物取りに来たなんて……まあ、いいか）
看護帽がないと、いつも通りの服装ではなくなってしまう。それだけは、シトラはどうしても嫌だった。
仕方なく、心を決める。
なんでもない風を装って、シトラは部屋に入った。
「失礼しまーす」
頭を掻きながら、そっと中に進んでいく。
布で覆われ、中が覗けないようになっている寝台が、全部で8つある。とはいえ、実際に布がかかっているのは、今は一つだけだった。
（よりによって……）
シトラは嘆息した。
まさにその寝台が、自分の寝ていたところだったからだ。
とりあえず他の七つの寝台を探してみるが、看護帽は影も形もない。
しかたなく、シトラは意を決した。残る寝台のそばに、そっと立つ。
「あの、すいませーん」
寝ていたら起こさない程度に、起きていたらこちらに気づく程度に、ゆっくりと小さく声を掛ける。
患者からは、反応がない。
「あのー、ちょっ……と開けますね」
びくびくしながら断りをいれ、シトラは布を横に引いた。
布が取り去られた瞬間、汗のにおいがつんと鼻腔を刺激してきた。
悪臭とまではいかないが、部屋を換気する必要がありそうだと、シ

トラは感じた。
（男の子？）
寝ているのは、少年だった。
体ごと向こう側をむいているので、顔は見えない。だが、その広い肩幅からして、少女ではない。
少年は、毛布をすっかり剥いでしまっている。そのせいで、体のあちこちに包帯が巻かれているのが分かった。頭も、何重もの包帯に覆われていて、真っ黒い髪の毛が隙間からのぞいている。傷だらけといった体で、どこか痛々しさを覚える姿をしていた。
（起こしちゃっては、いないみたいね）
少年は、看護婦の来訪にも微動だにしていない。それどころか、胴体や腕をだらりと敷布に横たえて、泥のように眠りこけている。寝息も、深いままだ。
少年を起こさないよう、
「帽子は、どこだろ」
呟きながら、シトラは見回した。
しかし、どこにも看護帽は見当たらない。寝台の上はもちろん、床と寝台のあいだや、折りたたみ式の卓子の中などを見ても、ないのだった。
確かにここは、シトラが寝ていた場所だった。もうここ以外に、帽子がありそうな場所はない。ここにもないとすれば、完全に紛失したとしか思えなかった。
シトラは、肩を落とした。
（あー、もう。困っちゃうなあ）
ふと掛け時計を見上げると、もう仕事の時間まで五分ほどしかない。
「急がないと」
しきり布をゆっくりと閉め、振り返る。
シトラは、体の一部を削がれたように、落ち着けなかった。
（いつも身に着けてるのがないと、なんか不安、かな？）

彼女には、それが少し怖いことのように感じられた。
いつもと違うことが起こると、どこへ行ったらいいのかが分からなくなる。いつまでこの病院にいられるのか、その期限が明日にも迫ってくる――そんな気がしてしまうのだ。
しかし、見つからないものはどうしようもない。諦めて、戸の方へ歩き出す。
すると、後ろで声がした。
「あの……」
「え？」
シトラは驚いて向き直る。
寝台の付近は、何も変わったところはない。さっきと同じく、そこにあるだけだった。ただ、かすれたような声だけが耳のみで捉えられる。
「これ、開けてくれませんか。いま立てないので」
覆いの向こう側から、その声が頼んできた。シトラはあわてて駆け寄り、布をふたたび開く。
（喉が痛そうな声ね）
声の弱弱しさと同じく、少年の顔はやや頬がこけて不健康そうだった。
その少年は、首だけをこちらに向けている。体は、さっきまでと同じく、布団にじっとりと沈み込んだままだ。なんとなく、生気が感じられない。
「ごめんなさい、起こしちゃいました？」
くちびるの端を軽やかに上げつつ、シトラは謝した。患者と会話する時には、この表情をするのが常だった。患者を安心させるのが看護婦の責務の一つというものだ。
少年は少し目を反らして、答える。
「いえ、いいんです。もともと半分は起きてたから」
改めて見てみれば、その少年はそう大柄でもなかった。病気か怪我でやせているのかもしれないが、もともと小柄な体型なのだろう。

シトラより、少し年下かもしれない。
「それならいいんだけど。私はちょっと探し物に来ただけなので、点滴とかがあるなら、まだだと思いますよ。もう一眠りしたらいかがですか？」
「いや、えっと」
少年は口ごもる。
シトラが瞬きしながら見つめると、少年は、体をひねって腕を伸ばした。床にあった荷物を、指先ですくい取る。
どうやらそれは、シトラの死角に置かれていたらしかった。
今度は体をこっちに傾けて、
「いま、帽子を探してるって言ってたけど、ひょっとしたらこれじゃないですか」
「え」
取り出して見せたのは、まぎれもなく看護帽だった。手渡してもらい、裏地を見る。
確かに「シトラ」という文字が、へたくそに刺繍されている。
シトラは救われた思いで、感謝を口にした。
「あ、確かにこれ、私のです。なくして本当に困ってたの。どうもありがとう」
少年はかすかに頬を上向かせて、応じる。
「僕が、あの……こないだここに来たとき、部屋の隅のほうに落ちてたんです。誰かが取りに来たら、渡そうと思って。そんなに大事なものなら」
少年はシトラと目を合わせて、ピタリと動きを止めた。数秒の沈黙の後、少年は言うべき事を選ぶように、ゆっくりと続ける。
「失くさなくて、よかったですね」
砂漠の中の水たまりのように、彼は微笑みかける。そんな彼の所作は、笑っていてもどこか寂しげだった。それが今にも崩れてしまいそうにシトラは思った。
（よっぽど、怪我がひどいのかな）

少年は足を折っているらしい。右足を分厚く包帯で包み、寝台の鉄パイプの上に乗せている。しかも、そこだけでなく全身に包帯がちらほら見えた。満身創痍、といってもいいほどだ。

（まさか、交通事故？）

「はい、ほんとに。それでは、えーっと」

シトラが言葉に詰まると、少年は即座に口を挟む。

「僕は、アスといいます」

「アスさん？　２音節の名前なんて、ちょっとめずらしいですね。ともかく、お大事にしてください」

シトラはいつもより余分にはにかみながら、慰めの言葉をかける。

「はい」

アスと名乗った少年は、そう答えた。が、彼のまわりには、どこか霧のようにとらえどころのないものが漂っていた。触れようとしても、さりげなくかわしてしまうような。そんな彼から、シトラは小枝を少しずつ落としていく樹を連想した。

（でも、なんか不思議な子）

笑顔を崩さずに、シトラは軽い会釈を最後に残す。布を引いて寝台を再び覆い隠した。

何日かぶりに頭にはまった帽子は、シトラの体の一部そのものだった。氷が融けて水を広げるように、馴染んだ感覚を甦らせている。アスのことは気になったが、なんとか仕事は始められそうだった。

掛け時計を見ると、

「げ、もう時間を過ぎてるじゃないっ」

もう彼と十分間も話していたことが示されていた。急いでシトラは、戸のほうに向かう。

少年はもう眠りに落ちてしまっていたかもしれないが、一言だけ付け加えた。

「それじゃ、おじゃましましたー」

（あの子、もしかして……）

シトラはその場を後にした。

結局、仕事を始めるのはすこしばかり遅れた。

「ね、フリュクテ」

狭い空間の中で、ささやいた声が幾重にも折り重なった。

だが、その声は隣まで届かなかったようだ。フリュクテから、返事は帰ってこなかった。

空気は湿気に満ちている。

そのせいで、目の前にあるはずのタイル張りの壁すら、すこしぼやけて見えた。加えて、会話も成り立たない。

反面、水滴が肌の上を這っていく冷感と、石鹸の質素な匂いは、とても鮮やかに感じられた。自分の輪郭をかたち作っているのは、いまは肌に触れる感覚だけだった。。

とうぜん、考え事だけがじわじわと進んでいく。

（今日のご飯はなーにかな？）

食堂で出される食事、それは重要な問題だった。そのことをシトラが考えない日は、ほとんどない。ふと、先日の雑用で仕入れた知識が頭に浮かんだ。

（食糧が病院に輸送されてくるのって、えっと、確か十日に一回だったっけ）

自分の寝台の、枕元に這ってある暦を思い浮かべる。

「はぁ」

お湯のしたたるシトラの唇から、息が漏れた。

ちょうど、隣のシャワー室からフリュクテが声を掛けてくる。

「なんか言った？　今ちょうど洗ってたんでさ」

「ああ、うん。えっと」

「うん」

蛇口をひねる音と、フリュクテの体重が壁のほうに移る気配だけが分かった。

「こないだ、飛行機が落ちたって言ってたじゃない」

「……うん」

「わたし多分、その人を見たと思う」
フリュクテが息を飲んだ。
「その人って、飛行機に乗ってた人のこと？　ほんとうに？」
「うん、ほんとう。一番西がわの病室で、見たの。多分、そうだと思う」
「なんで分かったの？」
「だって、かなり怪我してるみたいで、全身に包帯巻いてて。あと、事故の日に来たみたいだし――」
手拭いを頭に掛けて、シトラは戸を開いた。
水滴の床に垂れる音が、ざわざわと耳に響く。肌から上がった蒸気が、まだ視界を覆っていた。
（フリュクテはどう思うかしら）
考えながら、シトラは個室から出た。
同時に、フリュクテも出てきた。巻き癖の残った彼女の髪が、不安げに揺れている。
「それ、その人が言ってたの？」
「うん。ほんとにあれに乗ってたのか、直接は聞いてないけど。でも、それ以外には考えにくいなぁ」
「ふーむ」
腕組みして、フリュクテは唸った。深刻そうな表情で、何か考えている。いつもなら、ふざけているのかと思う所だった。
そしておもむろに、シトラを見やる。
「ねえ、どんなだった？　怖そうなの、やっぱり」
眉をひそめて、フリュクテは囁いた。
「ううん、別にそうじゃじゃなかった。わたしも、まさかと思ったけど。なんか、全身怪我で弱ってた」
「そう」
話しながら、シトラはあの少年のことを思い出した。
本来よりも体が縮んでしまったような、あの弱弱しさ。とても、こんなところまではるばるやってきそうには見えない。それでも彼

は、ここまで生き延びてきたのだ。そのこともまた、シトラには驚きだった。
この小さな病院に日々を送る自分とは、まるで違っている。
「わたし、また行ってみようかな」
それを口に出すつもりはなかった。だが、いつのまにか口が滑ってしまう。
フリュクテは、即座にシトラを見やる。墜落した飛行機を見たように、眼を大きく見開いていた。
「なに言ってるの？　なんでわざわざそんな……」
フリュクテは、シトラに詰め寄った。
「ほんとに危ないわよ」
音を立てて、水滴がシトラの頬に当たった。細かく飛び散って、湯気の向こうに消えていく。
「あっ」
シトラは、思わず一声あげた。
「うん、そだね。危ないよね」
「そうよ、うかつに近づいたら何をされるか。だって、ちょっと前までは――」
まるで独り言のように、フリュクテは言った。
「――敵だったんだから」
彼女の軽薄な雰囲気は、完全に消えうせている。むしろ、何か重々しいヒステリックなものを見せていた。
（そう思うのも、無理ないか）
シトラは失望に沈み込んだ。しかし、拳を震わせて、それに耐える。表に出すわけにはいかなかった。
無理やり笑顔を作る。
フリュクテの震えた肩に、シトラはそっと手を置いた。彼女の肩はしっとりと濡れて、なんとなくつかみ所がないように思えた。
構わずに告げる。
「変なこと言ってごめんね。さ、もう行こ」

フリュクテは恐ろしさを隠すように、胸に手をやっている。彼女の顔は蒼白になっていた――とまではいかない。しかし、頬の筋肉は引きつり、視線は床に釘付けとなっていた。

「う、うん」

ややぎこちない首の動きで、フリュクテはうなづく。

そんなフリュクテの態度は、シトラには少し寂しくもあった。あの少年が凶暴な人間だとは、一目見ればとても思えるはずがないというのに。

それでも、フリュクテは見に行こうともしないだろう。そういう確信が、シトラにはあった。

（敵……か）

歳相応なフリュクテの横顔が、それを物語っている。

シトラはすぐに気を取り直して、別のことを考え始めた。

呪文のように、小声で唱える。

「ご飯、ご飯……」

普段どおりに振舞おうと、彼女は決めた。

その日は、朝から空気が凍りついていた。看護服を着ていても、肌寒さは避けられない。鉛筆を持つ指先も、すっかりかじかんでしまう。

それに、冬の病院は、シトラはもとからあまり好きではない。普段の隠れた陰気さが、余計に膨張してはみ出してしまうように思えたからだ。

「はふ……」

左手が、あくびの息でほんのりあたたまる。

それはわずかな熱に過ぎず、指先はまたすぐに氷のようになった。それは、体の芯まで侵してしまいそうな寒さだった。

「あっ？」

膝に乗ったスケッチブックを、シトラは見る。

鉛筆が、紙の上をうまく滑ってくれない。線がぐにゃりと曲がる。

シトラは、水平線を描いたつもりだった。しかし、そのよじれたようすは、なめくじの這った跡のようだった。
「だめだ、こりゃ」
シトラは嘆息する。
昨日寝付いてから、彼女は夢を見た。もう何度目になるか分からない、海の夢だった。今は冬だというのに、夢の中の海はそれとまるっきり真逆だった。その風景を思い出して、紙の上に再現していく。
暑い日ざしがそそぐ夏の海を、シトラは鮮明に見た。静かに揺れる波面と、そして沖に出て行く一隻の船を、特に覚えている。
再び鉛筆をとる。しかし指先が小刻みに揺れて、とても描けなかった。なぜこんなに震えるのかと、不思議に思うくらい指が動かない。
シトラは、椅子に腰掛けた尻を上げる。
「そろそろかな」
描くのはひとまず諦めて、鞄にスケッチブックを入れた。
だが、その理由は寒さだけではなかった。
向き直る。
待合椅子の並ぶ廊下を見回し、シトラは自分のほか誰もいないことを確かめる。そして、壁のある一点に眼を向けた。
先ほどから、わずかな衣擦れの音が聞こえてきていた。部屋の中から、に違いない。その前までは、完全に静かだったというのに。
それは、寝ている患者が起きた証だった。
「お邪魔しますね」
シトラは室内に入る。
中の様子は、このあいだ来た時と変わりがない。ずらりとならぶ寝台の中で、一台だけに布が渡されている。
シトラの所作は、ゆっくりとしていた。しかし、以前ほどではない。もう、寝ている人を起こしてしまう心配はなかった。
シトラはその寝台に近寄り、そして断りなしに布を払い開けた。

「おはようございます」
挨拶をかける先には、少年が横になっている。少年は仰向けに、まっすぐと天井を見つめる姿勢だった。顔をこちらに傾けて、何かを言ってくる。
「あれ、すこし早――」
とたんに、少年の顔が疑問に染まる。
「あの……？」
「えっと、覚えてますか。わたし」
シトラは微笑みかけながら、自分を指差した。少年はたどたどしく答える。
「はあ。確か、こないだの」
「はい」
言う間に、シトラは背もたれのない椅子を引き寄せた。手の平と一緒に、鞄を膝の上に置く。少年の顔を見たまま、表情は崩さない。
彼は力なく寝ていた。
それに、相変わらず悲しそうな雰囲気を漂わせていたし、すこしやつれてもいた。
だがそれ以上に、彼は不安を露にした。眼は見開かれ、口はわずかに開いている。放たれた物を受け止めるように、あごを引いている。その顔は、どこか昨日のフリュクテの顔にも似ていた。
「僕を――」
口にすることもできないというように、少年は素早く目を反らした。シトラのつま先をじっと睨みつけて、口を結ぶ。
数刻の沈黙が訪れる。
なぜか、少年は今にも叫び出しそうだった。
だが実際には叫ばず、静かな調子で言い続ける。声がかすかに震えを帯びて、シトラの耳に差し込まれた。
「僕を、殺しに来たんですか」
火のような瞳が、シトラをおもむろに見返した。少年の変貌があまりに急なので、シトラはあわてて応じる。

「え？　何を……」
「嘘はつかないで」
少年は語気をあらげた。
「どうせこうなるってことは、最初から分かってた……」
そして、一気に吐き棄てる。
「ここで捕虜になった人間が、生かしておかれるはずがないんだ！」
病室の空気が、痛いほどに震える。
少年の行動はまったく予想外だった。シトラはすこしたじろぐ。
少年がつかみかかってくるかと思ったからだった。
「殺すって……？」
（あ、でも動けないんだ）
幸か不幸か、少年は骨折で動けないらしい。憎憎しげにシトラを見上げるばかりで、他には何もしてこない。安堵して、シトラは一息ついた。
（よかった、騒ぎになったら困るし）
せっかく早起きして、寒い中を廊下に張り付いていたのだ。失敗する訳にはいかなかった。捕虜になっている人間に会いに行くというのは、人目をはばかる行為だったから。
と、少年の表情が、徐々に不審そうに変わっていく。
シトラは、驚いて立ち上がった。
これ以上、少年に嫌われてはならなかった。だが、言うべきことをとっさに思いつけない。シトラは、しどろもどろになった。
「あ、ああの」
尻に押された椅子がぐらりと傾いた。さらに、脚にぶつかってとどめを刺されたらしく、椅子は床に転がった。かん高い金属音が、ベルのように鳴り響く。
直立し、数秒。
あっけに取られた少年の顔を眺めるうちに、ようやく気の利いた言い方を思いつく。

「か、勘違いするのは結構だけど、お静かに願いますね」
（って、静かにするのはわたしのほうじゃん）
自分のおかしなありさまを認識する。シトラは立ち尽くした。
少年はまだ疑っていることを示すように、目を細めている。しかし、さきほどよりは柔らかい口調で話した。
「だったら、なぜこんな時間に？」
椅子を拾い起こし、ふたたび腰掛ける。
「患者さんを早くに起こすなんて、どうかとも思ったんですけど」
シトラは、心臓が驚きで脈打つのを感じた。大きく一回、深呼吸する。
それから、言うべきことを言った。
「少し、お話を聞かせてほしくて」

少年は、またあらためてアスと名乗った。
「あの、名字は？」
「そんなのありません。僕には親が居なかったから」
自分が悪いことをしたように、少年はうつむいた。
彼の黒い髪は短い。そんなふうにしていても、よく表情が窺える。
悪いのは当然自分なので、シトラはすぐ謝った。
「あ……ごめんなさい」
沈んだ声で、少年が答える。
「いえ」
低くなった頭から、看護帽がずり落ちそうになった。シトラはそれを押さえる。そして、そろそろとかぶりなおした。
（ううっ）
会話も途切れ、気まずい沈黙がただよう。
（何から聞いたらいいのかな）
思案して、シトラは思いついたことを聞いた。
「ええと、職業は？」
「それは……空士に決まってるじゃないですか」

聞きなれぬ単語があったので、シトラは頭を捻った。
「クウシ？」
「飛行機を動かす者のことです。ここでは何と言うのか、知らないけど」
「飛行機……じゃ、やっぱり」
シトラは確信して、こぶしをぎゅっと握り締めた。それを膝に当て、少し前のめりになる。
少年は、まぶただけでうなずいた。
「ここに墜落したのは、たしかに僕です。もしそのことを言ってるんなら」
思い出すように、少年は目を閉じた。
「でも、なぜ墜落を？」
「墜落」
少年は苦笑いをうかべる。そんな程度の笑顔さえ、シトラは見たことがなかった。
「僕は、帝国軍の偵察機でした。この」
頭を枕から浮かせて、病室を見回す。
「病院の上を通った時に、撃墜されました」
「撃墜……それで、そんなに怪我を？」
「はい。”生きてるのは奇跡と思え”。ここの医者にそう言われました。そのかわり、飛行機は完全になくなってしまって」
シトラは嘆息する。やはり、予想通りだった。
「そうだったんですね。じゃあ、アスさんはどこか外国から来たんですか」
「そうです」
少年は、視線を天井に向けなおした。
「あの、看護婦さん」
「はい」
「さっきはすいませんでした。とつぜん、怒鳴ったりして」
シトラは、首を素早く横に振る。

「別に、謝ってもらうほどじゃ」
「でも、あまり驚かさないでください。僕がここでどんな風に思われてるか分からないけど、僕だっていちおう人間なんです」
静かな調子を保ったまま、少年は上を見ている。その眼差しは壁を突き通して、天空を眺めているようだった。彼が行き損ねた天空を。
「寝首をかかれるよりは、せめて、きちんと宣告されて殺されたいので――」
少年はあっさりと言った。あまりに自然に言うので、シトラには、そんな深刻なことを言っているように聞こえなかったのだ。
が、よく考えてみると、それは当然のことだった。少年の立場にしてみれば。
それでも、言うのを止められない。
「な、何を言ってるんですかっ」
立ち上がり、声を張り上げる。少年の体が、視界の下側に移動した。
今度は彼があっけに取られたらしい。口がわずかに開いたままだった。
「馬鹿なこと言わないでください。ここは病院ですよ」
心から湧き出るままに、言葉をそのまま放っていく。自分がなぜ怒っているのか、よくわからなかった。
「患者さんを傷つけることなんて、絶対ありません！」
頭に血が上るのが分かる。
さっきの少年ほどではないが、大声が出ていた。
「でも僕は、あなたにとっても敵なんじゃ？　それどころか、この人たちは全員、僕を憎むだろうって思ってたんです」
「そんなの関係ありません。敵でも味方でも、治療するのが病院の役目なんだから。それに……」
シトラは口ごもった。
昨日のフリュクテの顔が、脳裏に浮かぶ。

そのように言っていいのかどうか、確信はなかった。だが、シトラは結局口にした。
「きっと、みんなあなたが憎いわけじゃない。ただ、戦争におびえているだけなんです。ここに篭った生活がいつまで続くのか、不安なんですよ」
「本当に？　故郷では、捕虜は全員殺されると言われていて。ほんとうは、なぜ僕を病院に運んだのかも不思議に思ったくらいなんです」
少年は瞳を丸くして語った。
「それで僕は、ほとんど寝れませんでした。いつ処刑場に連れて行かれるのかと」
「なら、きっと今日からはよく眠れます」
シトラは気持ちよくほほえんだ。
そして、また椅子に座る。風も通らない病室の中で、こんな素直なことを言うのは久しぶりだった。
少年は、包帯だらけの体をよじった。負傷だらけの体が、さらに深く寝台に沈む。
「じゃ、そう思ってていいんですね」
「もちろん、わたしが保証します。といっても、わたしはまだ看護婦として見習いだけど。でも、この病院で捕虜を傷つけるなんて、どう考えてもありえませんから」
告げると、少年は寝息のように深く息を吐いた。
「よかった」
まるで彼は、たったいま、災難から助け出されたようだった。少年の動きに、寝台がわずかに震える。
「いままではとても、生きた心地がしなかったんです。この病院にいる間は生きてられそうですね」
「え、ええ」
シトラはすぐに返事をしかねた。
さすがに、病院の外のことまでは分からなかった。怪我した捕虜

が後にどういった処遇を受けるのか、聞いたこともない。
「私、退院したらどうなるのかは聞いたことなくて」
「戦争が終わったら故郷に帰れるか、それとも、その前に処刑されるか。そのどっちかですよ。でも、捕虜がどこに送られるか、とかは見たことはないんですか？」
「はい。病院で戦争のことを話したりするのは、えっと」
シトラは、ぴったりする言葉を探してしばし沈黙した。ほどなく、思いつく。
「タブー、って言うんでしたっけ。とにかく、あまり大きな声では、誰も。でも、傷ついて運ばれてくる人たちもいっぱいいるから」
「そうですか」
少年はもっと何かを言いたそうだったが、じっと黙り込む。彼もきっと不安なのかもしれない、とシトラは思った。
「やっぱり、故郷に帰りたいですか？」
シトラは問うた。
「それはもう、帰れるのなら、すぐにでも帰りたい。でも今は、生きているだけでも運が良かったと思うべきなんでしょうね、きっと」
自分のことなのに、少年の口調は淡々としていた。何か大きなものを、どこかに置き忘れてきた——そんなふうに、眼がどんよりと沈んでいる。
シトラは話題を変えた。
「そういえば、ここに来る時に……海、見えました？」
少年はちょっと変な顔をした。
「海？」
少し考えてから、少年は答える。
「見るどころか、故郷から飛んでここに来るまで、ずっと海の上でしたよ。でもここからは見えないんですね」
彼は、首を窓のほうに向けた。その窓に、シトラは近づく。
「そうです」

音を立てないように、そろそろと窓を開けた。乾ききった風が頬をなでて、室内に入り込んでいく。
朝だというのに、はるかな空にあるはずの太陽は姿を見せていない。幾条もの人工の光が、無機質に世界を照らすばかりだ。
「ここは地下だから」
窓から顔を出す。
目を凝らさずとも、鋼鉄で作られた「天井」が容易に見える。地上よりの狂音を跳ね返し、そして光までもさえぎる、あまりに強情な壁だった。
それは、何万人もの人が暮らすこの地下の居住区を、守るためのものだ。
だが、シトラは物憂い気分で言う。
「ここは安全だけど……でも、太陽の光だって射し込まないんです。すぐ外には、海もあるのに」
荒涼たる地上に、暮らす人はもういない。”鐘”の影響はもちろんのこと、異国からやってきた飛行艇がたびたび襲来してくるからだった。
壁が厚ければ厚いほど、人々は長くいき延びるということになる。しかしそれは、暗い湿り気を隠せない地下に生涯閉じ込められ続けるということでもあった。
「海？　……が、好きなんですか」
少年が不思議そうに聞く。
シトラはふと、思いついた。
（この人は、そんな所から来たんだ。閉じこもっていなくても、いい場所から）
あまりにも長い間、シトラはそんな土地から隔たってきた。映像として再現しようとしても、思い出せるる物は少ない。幼児だったころは持っていた、かすかな自由の息吹――芽生える前に摘まれた意識の塊が、記憶の底に泥水となってたゆたっている。ただ、それだけだ。

それに形を与えようとすることは、無理な話だった。まだ一度も持ったことがないのに、思い出せるはずがない。

しかし、一つだけ違うものがある。

「はい。とっても」

シトラは、不自然なほどにっこりとして言った。自分のえくぼを、泣きたくなるほどに上げる。

どこに居てもまぶたの裏に見られるのは、海だけだった。

その晩、シトラは数年ぶりに涙を流した。

後編

毎日のように送られてくる傷病者の数は、増加の一途をたどっていた。

居住区から遠く離れた、とはいっても忘れ切ってしまえるほどは遠くない地で、殺し合いが過酷になりつつあるという。空輸されてくる兵士の中には、機上で息をひきとる者も少なくない。そして病院のほうでも、薬品や包帯など医療器具が不足し、満足な手当てを与えられないこともあった。兵士の死に場所と化した病院には、生暖かくどろりとした絶望感が漂い始めている。

そんな時でも、一ヶ月に一度の休みはやはり、やってきた。頻度は少なかったが、唯一ゆっくりと休める日だ。いつもならば、シトラは一日中ごろごろしているところだった。

だが幸運にも、フリュクテも休みを取れたので、シトラは彼女と一緒に外へ出かけた。

「ちょっと空気が冷えてる、かな？」

「そうだね。地上はもう冬だろうから」

シトラは声低く言った。横に座っているフリュクテをよそに、ばたりと寝転がる。

芝生の青い香りが、鼻腔いっぱいに広がった。

娯楽になるような施設は、とっくに撤去されていた。巨大な地下壕の全体から、根こそぎだった。ましてや、歳若い少女の趣味に会う洋服店など、ひとつとしてなかった。なので、何の変哲もない公園に、こうして訪れることくらいしか出来ない。

シトラは、それでも満足だった。

「ねえ、フリュクテは――」

「ん？」

フリュクテは振り返り、柔らかい微笑みを見せる。

シトラは少しためらった。が、やはり話しておかなければいけな

い。きっともう、話す機会は他にないのだから。
「――好きな人とか、いるの？」
フリュクテはきょとんとして、数回まばたきした。
「好きな人？」
「うん、好きな人」
フリュクテは首をかしげた。
しばらく考えている所を見ると、彼女は普段、そんなことは考えてもいなかったらしい。意外と真面目なのだろうかと、思い始めたとき、彼女は答えた。
「いたはいたんだけど。片思いだけどね。何年か前に亡くなって、こっちに戻ってきたの」
瞳を曇らせることなく、彼女はあっさりと言い放つ。
シトラはたじろいで、上体を浮かせた。
「そうだったの！？　ごめん、悲しいこと思い出させちゃって」
フリュクテは首をふった。その仕草に悲哀さはない。すっきりと否定するばかりだった。シトラは、乾いたばかりの洗濯物を思い出した。
「ううん、別にいいわ。もう、どうにもできないんだから。このこと、いままでは黙っていたんだけど……」
フリュクテは、人差し指を唇に押し当てた。
「いまは、なぜか話したしたくなったのよね。休みの日だからかしら」
二人は、互いに暖かな笑みを交わした。
しかしフリュクテの表情が程なく変わる。にやりとした笑いに変わり、シトラを見つめた。
「こんなこと聞くって事は、シトラにも好い人できたの？」
シトラは声を詰まらせた。
「へ？　や、そ、そうじゃないんだけど」
「ふうん」
投げやりな風に、フリュクテは答えてみせた。背中を丸め、つま

先に手を触れさせている。そして、木立のほうをぼんやり眺めていた。日々の激務から開放されて、ちょっとばかになっているのかもしれない。
シトラは、波に体が溶け込むような心地よさを感じた。
それは平穏からくるものだった。きっとフリュクテもそうなのだろうと、シトラは思った。
（それに……）
公園の風景も、ゼラチンで固めたように緩やかに泳いでいた。人影はまばらで、木の葉の揺れ具合はごくささやか。風も少なく、視界を素早く移動するのはせいぜい鳥くらいのものだった。
微かな心地よさを、自分の見える世界にまで広げる。そんなことが、今だけは出来た。
シトラは寝たまま、ふと天井に眼をやった。地面から１００メートルはあろうかという高さの所に、鋼鉄の防壁が堅く打ち付けられている。
その外側の世界には、日常の感覚が開いていく余地はなかった。そこにあるのは、大いなる危険のみだった。人間がどんな感想を覚えようと、いっさい関係がない。ただ、迷い込んだ人間を殺すだけの――寂しい世界だ。
だが、そんな恐怖に包囲されればされるほど、ほんのわずかな平穏がいっそう鮮やかさを増した。侵されることで、輪郭が明瞭になるからだろう。
「わたしは、フリュクテのことが好き」
シトラは、ぽつりと言った。そして、頬の熱を紛らわそうと、一言付け加える。
「あ、変な意味じゃないよ。うん」
フリュクテはちょっと意外そうに、眼を見開いた。
「なに、突然？　――そりゃ、私もシトラが好きよ。友達だもんね？」
「うん」

寝返りを打ちながら、うなづく。
（ああ、これでいいんだ……）
シトラはそっと、胸に手を当てた。今この情景を、頭に焼き付ける。二人の座っているなだらかな丘から、公園を見回した。
ふと、シトラは思いつくことがあって、おもむろに腰を上げた。
「どうかした？」
フリュクテが聞いた。シトラは鞄を取り上げて、目当てのものを探す。
そうしながら顔をあげ、笑いかけた。
「フリュクテ、ちょっとそこに座っていて――」

少年の歩みは危なっかしかった。
一歩を進むたび、松葉杖の先端が床に当たる。その一定のリズムを持った音は、時計の秒針を思い出させた。
「大丈夫です？」
倒れそうになったら支えようと、シトラは少年を気づかっていた。が、歩く練習をさせるため、直接手で支えてはいない。おかげで、少年は一苦労しているようだった。
「前に比べたら、大分……はは」
顔を横に向け転びそうになったが、少年は持ちこたえる。声は取り繕ったように軽い。
「そうですか」
シトラも、少々気の張った笑い方をする。というより、そのような表情しか出来ないくらいに、彼女は胸の内が凍りつくのを感じていた。
（いよいよかあ）
肺が重石のように鈍く垂れ下がり、呼吸さえぎこちない。ためらいがないとはいえない。恐怖がないとはいえない。
しかし、向こう側に飛翔するような感覚を、彼女は感じたかった。
「じゃ、行きましょ」

「行けるんでしょうか」
シトラは、表向きには患者に付き添う形で歩いた。そして、白衣のすそに手を差し込む。
そして、病院の玄関先から、外の光景を注意深く見つめた。
分厚い天井が割れている。輸送船が、翼を変形させながら降りて来ていた。

「ごめんなさい」
シトラは小声でささやいた。両手で握っているのは、黒光りした引き金だった。それを満身の力で引きしぼる。
栓が抜けたような、耳に痛い音が炸裂した。放たれた筒が、硝子を突き破ったのだ。
輸送船の中の人影が、一瞬ざわめいた。
「あの、アスさん。これを」
「は、はい」
携帯用の防毒面を手渡しする。自分の分も、手早く頭に被せた。その間も、船の監視は怠らない。
「どこからこんな物を？」
眼を見開いたまま、少年が聞いた。
こんな時にどんな表情をしたらよいのか、シトラはよく分からなかった。とりあえず、曖昧に笑いかける。
「えーっと。その、こういう時くらいしか使い道がなくって」
「催眠ガス？　こんなものいったいどこで……？」
目を細めて、少年が唸る。
「前に手に入れて、取っておいたものなんです。今はその、時間がないので……後でゆっくり話しますね」
そうして無理やり会話を打ち切ると、少年は大人しく黙り込んだ。
シトラはとっさに、視線を転じる。
撃ってから1分も経ずに、筒の吐き出した白い煙が天井まで達していた。もう人が動く気配はない、と思えたが。

（いや、まだ）
おそらく1人、まだ動いていた。扉の方に近づいてきている。脱出しようというのだろう。ともかく、早く眠ってもらわなければ厄介だった。失敗すれば、計画していた時間に間に合わなくなってしまう。
扉が開けられる前に、シトラは自分から船に入った。
乗員の男が1人、まだ眠り込まずに立っている。壁に寄りかかり、必死で口を押さえていた。
看護婦の格好をしたシトラを見て、そう警戒もしなかったらしい。こちらに近寄り、疑問を発そうと――
口を開いた瞬間に、シトラは懐から脱脂綿を取り出した。もちろん、強力な薬品をたっぷりと染み込ませてある。
「ほんとにごめんなさい」
おざなりのわびを入れてから、それを男の口と鼻に素早く押し付けた。
たちまち、男の眼球がぐるりと上向く。そのまま意識を失ってくずおれた。体が地面に衝突する、その前に抱きとめる。そして床にゆっくりと寝かせた。
「ふぅ」
しぼみ切っていた肺が、やっと少し膨らんだ。そんなふうにシトラは感じた。よほど緊張していた、のかもしれない。
（このくらい、前はよくやっていたのに）
平和に慣れ過ぎていた。潜りこめないほど小さな平和に、それでもシトラは浸っていたのだ。ありありと、そんな事実が眼の奥で輝いた。
（今になって、こんなことが分かるのね。私は、ここを離れたくないのかもしれない）
病院での生活を振り返り、シトラはたまらない気持ちになった。病院の労働はけして簡単なものではなかった。しかし、彼女は知っていた。病院の生活は、ぬるま湯のように心地よかったことを。

（でも、ここに居ることは逃げることにしかならない。私は、辛い記憶にもちゃんと向き合える。そのはずなんだから……）

「えっと、看護婦さん――と呼んでいいのか分かりませんが、とにかく急いだほうがいいんでは？」

少年の篭った声が、防毒面の下から聞こえた。

シトラが突っ立ったままでいたので、少年は焦ったらしい。あるいは、常ならないシトラの手際よさに、度肝を抜かれたのかもしれなかった。

シトラははっとして、床を見つめっぱなしだった視線を上げた。

「は、はいっ。そうでした。はやくしないと、病院の人たちが変に思って、船のほうに来るかもしれませんしね」

催眠ガスを出し尽くした筒を拾い上げ、シトラはまず看護服の袖をたくし上げた。

「アスさんは操縦席の方へ。飛行だけはあなたに頼る他ないので、どうかよろしくお願いします」

「はい。まかせてください」

「あと……」

シトラは、ちょっと付け加えた。

「どうしました？」

「わたしのこと、よければ名前で呼んでください。それに、敬語も止めにしましょう。私たちにはもう、何の壁も要らないんですから」

それを聞くと、床が突然海にでもなったかのように、少年は口を半開きにした。よほど先のことばかりを考えていて、頭が回らなかったのだろう。数瞬後に、少年は元の状態に戻った。頭を、小さく縦に振る。

「ああ、そうで……そうだね。これからはそうしよう。よろしく」

やや上ずった声で答えてから、少年は手を差し出した。

包帯で巻かれた手は、シトラにはややはかなげに見える。傷ついた手だ。あまり重いものを持つこともかなわないだろう。ひょっと

したら、今はシトラより非力かもしれない。
「うん」
シトラが握り返すと、少年ははにかんだ。その表情はしかし、どこか確信めいたものを秘めている。もはや敵はなし、とでも宣言しているようだ。
「これで、僕たちは共犯者――しかも脱走者、ってことか」
「その通り」
シトラは愛嬌たっぷりに答えた。

（私は行ける。故郷の海に、私は行けるんだ……）
興奮に、シトラは胸が躍るのを抑えきれなかった。
脱走の計画はシンプルだ。定期的に生活必需品などを運んでくる連絡船を乗っ取って、外に脱出する。それでも安心はできない。戦争中に脱走する者が、どういう種類の人間なのか。誰もが敵のスパイだと考えて、追跡してくるだろう。
そこはアスの操縦に頼る他ない。しかし、一定以上飛べば、少年の所属していた軍の制空権に入る。そうすれば、最早追ってはこれまい。
全ては、故郷の海岸へ戻るため。シトラが、何年もかけて計画していたことだった。しかし、ここ数ヶ月がくるまでは、肝心かなめの飛行機の操縦役がいなかった。
幸運なことに、今はアスがいる。
（きっと何とかなる。何とかしてみせるわ）
シトラはそう誓った。
そのうちに、眠りこけている乗員をすべて船の外に運びだす。彼らを連れて行くわけにはいかない。
全員、発着場の目立たない所に引きずっていった。シトラがいつもラジオ体操をしていた、大木の近くだ。しばらくは見つからないだろう。
飛行機に戻ると、アスが外に立っていた。シトラを見とめると、

小走りになって近づいてきた。
アスは顔を引きつらせている。
「どうかしたの？」
「まずい。船に燃料があまり残ってない」
シトラは驚愕のあまり、口を半開きにした。
「えっ、うそ……じゃあ、飛べないの？」
「飛べることは飛べるだろうけど。とても追っ手からは逃げ切れない。そんなに加速したらすぐガス欠になってしまうから」
うつむき加減になり、アスは吐き捨てた。
「そんな、ここまで来たのに」
シトラはこぶしをきつく握り締めた。
（このままじゃあ……）
「ねえ、何か方法は」
「燃料がなければ、いくらなんでも自由に飛んだりできない。残念だけど……」
と、その時シトラは耳をそばだてた。
「しっ」
「？」
シトラは船の陰から向こうを覗いた。
例の大木の近くで、病院の職員らしき人がいたのだ。昏睡状態でそこに倒れていた船員をみつけたらしい。驚愕で不自然に腰を浮かせつつ、病院のほうへ去っていった。
おそらく、人が何人も倒れていると報告しにいったのだろう。
「人がいる。もう気づかれちゃったか」
「何だって……いったいどうするんだ？」
アスの言葉はいっきに気弱そうになった。ちょっと頭に血が上ったので、シトラはつい語気を荒げて言い放つ。
「ちょっと黙ってて」
（燃料を補給するのは……無理か。燃料は貴重だから、さすがに厳重にしまってあったし）

無数の諜報活動の記憶から、彼女は必要な情報を取り出した。燃料は病院そのものの内部奥深いところにしまわれている。人目が多くて、夜中でも盗み出すのは不可能だった。
「こんなすぐに計画が頓挫するとは思ってなかったな」
「諦めたらだめ。何か考えないと」
危機にたいしては、ともかく腰をすえて考えを練るほかない。シトラは、目を細めて地面に生えた雑草をにらみつけた。
（町に潜伏する？　いや、居住区自体が小さいんだから、そんなことしてもすぐにみつかっちゃう。やっぱり脱出する方法を……）
「僕の機が残っていればな」
シトラが必死に考え抜いている横で、アスは小声でぼやいた。シトラは非難の眼差しを浴びせようとする。
が、中途にひらめいたことがあった。
「あ！　そうだ」
「何？」
シトラは息を吸い込み、一声で言い切った。
「この病院の付属基地に、何体か戦闘機が配備されてるの。それを使って逃げればいいわ」
解決策をみつけたので、シトラは自然に肩を躍動させた。それとは裏腹に、アスは呆けたようにシトラを見つめる。
「そんなの、どうやって盗むんだ。厳重に警備されてるんだろう、どうせ」
「うん。だけどね」
確信をこめながら、シトラは告げた。
「私なら、いちおう取りに行けるの。簡単にとは言わないけど……」
まだ少年は納得いかないようで、眉をひそめていた。が、シトラは彼をむりやり引っ張る。
「とにかく。気づかれる前に、早くいきましょ」

警報が鳴り響く。病院と、付属施設全てに届いている警報だった。
『緊急放送です。ただいま、院内に不審者が侵入しました。職員、患者の皆さんはただちに――』
シトラとアスは、坑道のように狭い横穴にいた。四つんばいになって、ひたすら進んでいく。
基地の天井の通風孔だった。シトラが、よく侵入路として使っていた通路である。
「もうばれたみたいだね」
アスのくぐもった声が、シトラの後ろから聞こえてくる。
「言われなくても分かってる」
『繰り返します。ただいま、院内に――』
警報が何度も鳴り響く。確実性を失した逃亡を思って、シトラは陰鬱なため息をついた。
そんなシトラをよそに、アスはあくまで興奮した声を投げかけた。
「しかし、信じらんないな。君が……帝国の命令を受けて侵入したスパイだって？　それじゃ結局、君と僕は最初から味方だったんじゃないか」
「味方も何もないわ。最初は、正体を明かすつもりはなかったんだから」
シトラは言下に低い声で言った。
「そうか」
「聞きたいこともあるだろうけど、今はちょっと面倒だから後にしてくれる？」
「時間がない、か。わかってる。あとでまた聞くよ」
アスは名残惜しそうに口をつぐんだ。
「ところで、話しは変わるけど、なんで最初から戦闘機を奪わなかったんだ？」
シトラは短く嘆息した。少年を黙らせるのが難しいと分かったからだ。
「……最初は、輸送船でこっそり逃げるつもりでいたの。単に輸

送を終えて帰るようにみせかけてね。でも戦闘機を奪うとなれば、本当に反旗をひるがえすことになる。確実性は低いし、だいいち危険だから」
シトラは、上の壁から落ちてきた物をつまみあげた。目の前に持っていく。それは、蜘蛛と思しき生きものだった。それに危害を加えはせず、下方に放り投げる。床のフィルターを通じて、蜘蛛は通路に落下していった。
「もっとも、もう遅いだろうけど。多分、今ごろ病院は警備員でいっぱいになってるでしょ。不審者、とおもわれてるらしいし」
「ここなら、あまり見つかりそうにないけどな」
アスがゆったりとした調子で言った。何故彼がそんなに平静なのか、見当はつきかねる。だが、予想外のことに出くわしすぎて、かえってそれに慣れてしまったのではないか――とシトラは解釈した。
（でも、本当に危険だな……）
ひょっとすると、計画は頓挫するかもしれない。
その可能性を思い浮かべるだけで、シトラは身の毛が逆立つように感じた。
シトラはアスに問いかけた。
「ほんとうに、撃墜されるかもしれないの。切り抜ける自信はある？」
「さあ？　戦いで何が起こるのかなんて、わからないよ。自信なんてないな」
「……頼りないなあ」
シトラはちょっとうなだれた。彼の答え方がよければ未来が明るくなる、というわけではなかったが。
「だけど、僕は一回は生き延びたし……たぶん、今回も生き延びれるんじゃないかな。そう思うことにしてる」
「なんか、いいかげんに聞こえるけど」
「要するに、心配しても意味がないってことだよ」
なだらかかつ一本調子な口調で、アスは言った。不思議と、確固

とした物言いである。よくわからなかったが、シトラはとりあえずうなずいた。
「ところで」
アスがシトラのふくらはぎをつついた。
「そろそろじゃ？」
「うん。ちょうど戦闘機の発着場の真上に来たわ。誰か人は――」
床のフィルタに、片目を押し付ける。
眼下に広がるのは、かなり横に長い空間だった。大きい質量をもった黒い塊が、その部屋に十個あまり置かれている。
それは、戦闘機の群れだった。
暗闇の中に、それらが石像のごとく眠っている。
（なんか、ちょっと不気味……）
シトラは身震いした。
部屋の風景はともかくとして、そこには人影はなかった。
「――いないみたい。とりあえず、わたしが先に下りる。アスはその後に下りて、戦闘機のほうを準備しておいてくれる？」
「了解」
「わたしは、発進口を開けて……あとは、誰かが来ないよう見張ってるから」
「開けるって、一体どうやるんだ？　管制の協力もないのに」
「細かいことは気にしない！　とにかく任せといて」
シトラは告げると、通風孔の枠を外す。
天井から床までは、結構な高さがある。ゆうに三メートルはあるだろう。そこでためらっていてもしょうがないので、シトラは意を決した。四角い穴の一辺に、右手をかける。
芥子粒ほどの恐れもない。そう確信できる一瞬が訪れると、シトラは穴から跳び下りた。
つま先が、まっさきに地面に触れる。
膝を曲げて、シトラは床に転がった。衝撃を逃がすための動作である。

だが思いの外、体をひねりきれなかった。膝に静電気のような痛みが走る。とっさに、その箇所を手の平で覆った。
シトラは深く嘆息した。
「あたた……やっぱ体がなまってるよ」
「大丈夫か！？」
アスが上から声を投げる。
シトラは少しだけ嘘をついた。
「大丈夫。これくらい出来ないと、スパイなんてやっていけないもん」
平気な風を装って、シトラはすっくと立ち上がった。
「それより、アスはどう降りようか」
首を真上にむけて、シトラは声を投げた。
「そうだな。まあ脚が折れてるから、着地するのはちょっと無理か」
アスは途方にくれたように、堅そうな床を眺めていた。そして、真顔で頼んでくる。
「悪いけど、飛び降りるから受け止めてくれないか」
「あなたを受け止めるの、わたしが？」
「ほかに誰もいないだろう？」
当たり前のように、アスは言った。
「なんか立場が逆な気がするけど……」
シトラは小声でぼやいた。
こういう時は普通、男のほうが落ちてくる女を紳士的にキャッチするものだろう。とはいえ、アスの体の状態では、そんな古典的な劇の一幕は望むべくもなかった。
「何か言った？」
「いいえ。あの、体重はどのくらいあるの？」
「君の1．5倍はあると思うよ。でも、君なら大丈夫じゃないか。腕力が――」
シトラは、とくに冷ややかな仕方で目を細めた。

「あ、いや看護婦は重労働だって、シトラが言ってたじゃないか。だから」
「……まあ、そうね。クッションになりそうな物もないし。わかった、じゃあ飛び降りて。受け止めてあげるから」
シトラは視線を外しながら答える。
「恩に着るよ」
言うとアスは、怪我していないほうの足を穴の淵にかけた。
「じゃあ行くよ……」
「いつでもどうぞ」
シトラはおざなりの微笑みを投げかける。
「……それっ」
掛け声とともに、アスの体が落下する。シトラは上に手を伸ばした。
手のひらにアスの体が触れる。重力に逆らわず、落下速度を抑えていく。バランスを崩さないよう、アスの体を二の腕に抱きこんだ。
「うっ」
力を入れる一瞬、シトラは声を漏らす。
渾身の力により、アスは地上三十センチほどのところで静止した。衝撃はかなりのものだったが、シトラはなんとか耐え切った。
（これじゃ、わたしが男みたいじゃない。しょうがないけどさ……）
幸いシトラは、腹が立てば立つほど自分の表情を柔和にみせる技術を持ちあわせていた。自分であきれるほどの感じよさを、シトラはふりまく。
「大丈夫？　どこかぶつかってない？」
アスは片足で立ち上がった。肩をすぼめる。
「僕はなんともない。いや、すまなかった」
「ううん。しょうがないよ」
シトラはまた愛想よく笑った。今度は、腹の虫は半ばまで収まっている。。

「……とにかくアスは戦闘機の方をお願い。発進できそうだったら言って。私は入り口の所で警戒してるから」
「分かった。何とかやってみるよ」

『緊急放送です。ただいま、院内に不審者が侵入しました。』
「急がないと」
シトラは胸ポケットから電子端末を取り出した。同時に、壁に設置されている端末の蓋を外す。
（上手くいくはず）
祈るような気もちで、シトラはコードを伸ばして接続した。
スパイ活動の結果、この病院施設の機密情報は大抵分かっている。長年練ってきた脱走の計画を、ここでつぶすわけにはいかない。
端末の画面に、パスワードを盗聴したのは、2、3ヶ月前だった。その時から変わっていなければ、すぐに発進口が開いてくれるだろう。
しかし、一度でも入力して決定してしまえば、発進口を開けようとしている者の存在が管制室に知られてしまうに違いない。人が来る前に飛翔できるかは、一つの賭けだった。もちろん、飛行機を使う者などいないはずなのだから、管制を担当する者が誰もおらず、したがってまったくばれずに済む、ということもありうる。
そんなに甘くはない、と本能が告げた。
（考えても仕方ない、か。とにかくやってみよ）
そのとき、少年が報告した。何かのレバーを倒しながら、頬を紅潮させている。
「シトラ、こっちはどうにか……なりそうだっ」
「あとどれくらいかかる？」
少年は整備士のようにかがみこんで、機体の翼のあたりをいじっている。が、顔だけ上げて答えた。

「たぶん、あと十分くらいだ。どうもあまり使ってないみたいで、思ったより時間かかったけどね」
「ここから戦闘機が出撃することってあるの？」
「調べた限りでは、あまりないわ。あなたみたいに敵が侵入してくることもあるけど、大抵は偵察でくることが多いから、迎撃する意味がないみたい」
「……それでいいの？」
「さあ、わたしに聞かれても」
シトラは首をかしげた。
「でも、訓練で飛ぶことも少ないみたい」
「そういえば、見たところ何ヶ月も使ってない感じだったな」
シトラは嘆息した。話すことが時間の無駄だと分かってはいたが、我慢できずに口に出す。
「どうやら、燃料が足りないようよ。ここは辺境だからかもしれないけど、物資が絶対的に不足している。この居住区だけじゃない、周辺の居住区はみんなそう。それに、私みたいな帝国のスパイの侵入も許してる。これだけ情報を外から盗めたのも、ずさんな防諜体制のおかげなの。この居住区は、きっともうダメね」
シトラは淡々と語る。
少年は油のついた手で頭を掻いた。少し落ち込んだ声でつぶやく。
「こんなときなんて言えばいいんだろ。ごめん、でいいのかな」
シトラは不意をつかれたように感じた。
「別にアスのせいじゃないじゃん」
「そりゃそうだけど。その……」
アスは口をつぐんでいる。
「ん？」
喉を鳴らすようにして、シトラは続きを促した。
彼が何を言いたいのか、シトラにはよく分からなかった。彼のおかげでこうして脱出をおこなえるのだから、シトラには彼を謝らせる理由などない。

「ま、いいや。とにかく今はコイツに集中するよ」
バンバンと機体を叩きつつ、アスは作業に戻った。
（変なの……）

シトラはガレージの入り口付近で警戒に当たっていた。だが、ついに恐れていた事態が起きてしまった。
「まっ、ずい」
兵士の格好をした男が、三人ほどまとまって廊下の向こうに立っている。この基地の兵士だった。ただここでふらふら歩いているだけとは考えにくい。不審者を探すためにやって来たか、あるいは飛行訓練のために来たのだろう。
「アス、準備はまだなの！？」
少年は声を抑えて叫んだ。
「もう間もなくだ！　発進口を開けといてくれっ」
「わかった」
思い切って、シトラはパスワードの決定ボタンを押した。
（お願い……）
すると、開錠を示す赤いランプがまたたく。
どうやら祈りが通じたらしかった。
「やった！」
鳥の鳴くような電子音が響く。
『ハッチが開きます』
その音声がしたかと思うと、すぐさま天井に割れ目が走る。薄暗い格納庫に、たちまち細い光が差し込んだ。ハッチが開くのに従い、光も着々と面積を広げていく。
しかし同時に、三人の兵士もこちらに気づいてしまったようだ。駆け出している。
「まずっ……」
「何だお前らは、そこから離れろっ」

兵士が叫んだ。泥棒か何かかと思われているのかもしれない。実際そんなものだとしても、大人しくお縄にかかるつもりはシトラには毛頭なかった。
急いで格納庫のドアを閉じ、兵士たちを視界から消し去る。手早く鍵を掛けた。
「シトラ、早く乗って！」
アスが叫んだ。
「んっ」
シトラは返事代わりに唸る。
立ち上がる。
戦闘機の上から、アスが片手を伸ばしていた。つかまれ、という意味だろう。
（わたしは……わたしは帰る）
気炎をあげて、シトラは走った。興奮のせいか、火照った体に汗が湧き出す。それをぬぐう暇もない。
ほどなく、天井のハッチも開ききったようだ。紅い陽の光が、戦闘機を鮮やかに染め上げる。
（もうすこしっ）
前だけを見つめていた。
そのせいか、シトラは何かに蹴つまずいた。
「あっ！」
咄嗟に体をひねり、肩から地面に衝突する。衝撃が、容赦なく体をつらぬいた。
「くー、あいたた……わたしとしたことが、不覚ぅ」
膝を抱えて、シトラは海老のように丸くなった。
ぶつけた肩もさることながら、むしろさきほど痛めた膝が振動でうずく。あまりに痛むので、すぐには立ち上がれなかった。
「シトラっ」
アスが呼ぶのが聞こえた。きっと、血相を変えているのだろう。
それでも、シトラは動くことが出来ない。シトラは己の不運を呪っ

た。それでも、自分でどうにかするしかない。
（立たないと……立たなきゃ）
痛めていない脚と、腕を地面についた。それを支えに、シトラは必死に身を起こす。
自分の体と格闘しているシトラの所に、アスが走り寄ってきた。わざわざ戦闘機を降りたらしい。だが、彼とて片足は不自由な状態だ。松葉杖を抱えてはいたが、それを使うのはじれったいらしい。自由な方の片足で「けんけん」をしている。
彼は片手を差し出した。
「立てるか？　早く逃げよう」
「アスだって、まともに立てないじゃん……」
言いながら、アスの手につかまる。2人同時に転ばないように注意しながら、そろそろと立ち上がった。
「そうだね」
アスはにやっと笑ってみせる。
「行こう」
「うん」
ほっとしながら、シトラは答える。だが、その安堵も長くは続かなかった。
突如として、金属が金属にぶち当たる物凄い音が鳴った。シトラが振り向くと、ちょうど兵士たちが扉の鍵を壊した所だった。拳銃で錠前を撃ったようだ。
「止まれ、動くな！」
1人が拳銃を抱えたまま走り、またたくまにシトラの左手を掴む。容赦なく引き寄せられた。
「離してよっ」
「抵抗するな、撃つぞ！」
真っ黒い銃口が、シトラの眼前からほんの十センチという所に向けられる。
（あちゃー、やっぱこうなっちゃうか）

シトラは聞こえないように嘆息した。
あまり切迫した気持ちにはなれなかった。ここ数年はともかく、それ以前はこのような状況に常に出くわしていたからだろう。
それに、シトラはもう故郷のことしか頭になかった。
心臓の鼓動は、ごく平静。男の凶相も、モニターを通して眺めているように現実感がない。
（ごめんなさい、あなたは何も悪くないのにね。でも……）
体の重心を、ゆっくりと片足に移す。その分だけ、痛めた方の脚が軽くなった。
ある程度は、自由に動かせるはずだ。
（……自分から距離を詰めてくるなんて、馬鹿じゃない？）
そこまでだった。
支点は片足、回転軸を腰。
その規制に則って、シトラは痛めた方の脚を思い切り振り上げた。おおまかに空中に思い描いた軌跡を、その脚が実在のものとしていく。
小ぶりの鉄槌のような俊敏さと凶暴さをもって、靴の踵が唸った。そして、男の頭に襲い掛かる。
いやになるような鈍い衝突音。それが、耳の奥まで浸入した。
（骨にひび入ったかも）
それが自分の足のことなのか、男の頭蓋のことなのか、それは判然としなかったが。
男の拳銃が、地面に転がる。気を失ったせいだろう。ほどなく男の体も、地面に衝突した。
素早くその拳銃を拾い上げる。そして、白目を向いている男の頭に、その銃口を押し付けた。
ちょうど格納庫に入ってきた残りの2人は、そろって仰天したようだった。気丈にも、拳銃をこちらに向けている。だがあれでは、撃ったとたんに反動で倒れるだろう。
シトラは、即座にその場の統率者となった。統率者らしく、なる

べく穏やかな声で告げる。
「仲間を殺されたくなかったら、いますぐここから出てって……もちろん、拳銃は捨てて。そうすれば、殺しはしないから」
数瞬の躊躇があったが、男たちは指示通り拳銃を捨てた。
「アス、わたしの腰からこれを外して。で、撃って」
シトラはあごで自分の腰を指し示す。催涙ガス弾の装填された銃だった。
アスは、彼女の勇姿に呆然と見入っていた。だが、ふと我に返る。
「いいのか？」
「わたしは、なるべく息を吸わないようにする。あなたもそうして」
「そういう意味じゃないんだけどな……まあ、分かったよ」
アスは短くうなづくと、銃をシトラの腰から外した。
「ご愁傷様！」
途端に、銃口から円筒型の弾が飛び出した。ちょうど、二人の男の頭上で破裂する。
弾は瞬く間に爆発し、白いガスが壁や天井を舐めるように拡散していく。男たちは虚を突かれたように、右往左往した。だが、数秒以内に意識を失い、倒れる。
それを確認するが早いが、シトラは手に抱えた男を捨てた。
ガスを吸わないよう、片手で鼻と口を押さえる。ほとんど役立たずの片足を引きずりながら、シトラは可能な限りのスピードで駆け出した。

戦闘機に、電気的な命が宿った。
救急車や輸送船などとは、比較にならない力強さ。それが機体中をかけめぐっていくのが、シトラには分かるような気がした。
シトラの鼻先には、アスが腰掛けている。その戦闘機が複座式だったのは運が良かった。単座式であれば、ぎゅう詰めになって操縦どころではなくなったはずだ。

「よし……動かせそうだ」
アスは言うと同時に、操縦桿を強く引き寄せる。
機体は落ち着きのない鳴動をもって、操縦者に応えた。炎とガスを地面に叩きつける爆音が、空間を千々に切り裂いてゆく。
前触れもなく、機体が浮かび上がった。完全に開ききったハッチを、機体が潜り抜けていく。
「手馴れてるね」
シトラは素直に感心して、褒め言葉をかける。
「ほんとに手馴れてるなら、撃墜なんかされないよ」
アスは振り向いて、苦笑いした。一見、気楽な風に見える。が、よく観察すると、彼の額にはうっすら汗が滲んでいる。髪の毛も湿気を含んで少し逆立っていた。
シトラは反射的に、懐からハンカチを取り出す。看護婦の習性のようなものだった。
（でも、汗が邪魔で前が見えなくなったりしたら大変だし……）
シトラは身を乗り出した。
「ねえ、汗かいてるよ」
告げて、否応なしに湿気を拭い去る。アスは居心地悪そうだったが、無駄な抵抗はとくにしなかった。
「はい、おしまい」
「ありがとう。用意がいいんだね、君は」
労をねぎらうように、シトラは相好をくずす。
だが、シトラが考えていたのは別のことだった。
（少なくとも、私は今まで不幸じゃなかった。でも、ごめんなさいね……さようなら）
声には出さず謝る。シトラはそうして、眼下の病院に別れを告げていた。
地上は、薄もやのかかった夕闇に支配されている。刻々と変化していく自然――それは地下では決して感じることのない物だった。

だが、それと同時に感じなくて済むものでもある。安定した状態から、いつ崩れるとも知れない不均衡へ飛び込んでいく恐怖――そんなありがちな感覚が、シトラの体中を走っていた。こんな緊張状態には慣れていると、シトラは自分ではおもっていたのだが。病院での比較的平和な生活が、精神の抑制術を蝕んだらしい。

あるいは――。

（大丈夫、きっと大丈夫だから）

――さすがに、空中で命のやりとりをする経験は持たなかったせいかもしれない。

操縦席の小型モニタを、シトラは凝視した。

この機体のはるか後方に、小さな黒点があるのが見て取れる。暗い紅色に染まった空を背景にして、それは見間違いようもなく存在していた。

シトラの不安を察してか、アスは沈黙を破った。

「追っ手が来たみたいだ。距離は七千メートル。数は……三機。発信地からはすでに二万メートル移動。もう海の真上だから、撃墜されたら助からないな」

アスは、レーダーなど種々の計器類を目で追っている。シトラには分からない情報を、そこから読み取っているようだ。

「逃げ切れるの？」

シトラはその答えが知りたかった。なので、焦りを隠しもせず聞く。

それに、焦りは隠しきれないほどでもあった。

「正直言うと、分からない」

沈んだ表情で、しかし淡々とアスは答えた。

操縦に集中しているのだろう。これで言葉の発し収めとでもいうように、神妙な面持ちだった。

「そんなことは考えないほうがいいよ。考えても仕方がないんだし。頼りなく思うかもしれないけど、今は僕に任せておいてくれ」

「あ、そんなつもりじゃないんだけど」

こちらを安心させるためか、アスは短くうなづいた。
「さあ、舌を噛むからもう喋らないでくれよ……！」
瞬間、アスは操縦桿を精一杯と見える力で押し下げた。

決勝点を目指す競走馬のごとく、戦闘機は狂ったような吼え猛りをあげた。噴射炎が尾を引き、自らの航跡を次々と後方に刻んでいく。

追っ手の3機は、こちらと劣らぬ速力でまっすぐに突進してきていた。が、突如進路を変える。3機とも別々の位置に分散し、それでいてなお追跡を続けている。

おそらくは同じ種類の機体なのだから、本来は追いつかれようがない。しかしこの先、どれほど飛び続けなければいけないのかが、シトラにもアスにも分からなかった。よって、派手な速度を出して燃料を浪費することはできない。必然、出せる速度に限界が生じる。

そのせいか、追っ手は徐々にこちらとの距離を縮めていた。手のひらで摘みこむように、こちらを包囲するつもりらしい。

距離が一千メートルに縮まる。その距離は、一般的な航空機銃のだいたいの射程距離であった。

刹那、アスは反射神経の赴くままに腕を倒した。

操縦桿が切られる。

風切音だけを抜け殻として、戦闘機は下方に旋回した。曲がる角度はかなりきつく、一時的にほとんど海面に向かって突き進む形になる。

追っ手も、直ちにそれに続いた。

奇襲の望めないドッグファイトの戦場で、勝敗を左右するのは操縦者の技量のみ――

そんなことを見せ付けるかのように、アスはさらに複雑な命令を戦闘機に与えていった。

戦闘機は、ただ忠実に従う。

さらに右方に旋回し、そして追っ手との距離がさらに縮まってい

く。それが７００メートルほどになると、追っ手は発砲を始めた。
殺害の意思を剥き出しにした金属の矢が、雨あられと戦闘機に降り注ぐ。
当たらない弾丸の中には、機体の外の数メートルまで迫るものもあった。大気に空隙を生じさせるまでには至らない速度だが、それでも肉眼ではとても捉えきれない。日常世界では決して耳にする事のない鋭い音が、その存在を強烈に主張するばかりだった。
何にせよ、戦闘機は敗北の瀬戸際にある。
避けきれるか、命中するか、それだけは技量でコントロールしきれるものではないのだ。すべては賭けだった。
だがそれすらも、一対一での話である。
複数の原点から伸びる死の直線に対して、それと重ならないように移動するのは不可能だ。賭けにすらならない。
操縦者は、あえてその不可能な選択肢を採る。射撃の的になる、まさにその空間へと戦闘機は飛び込んでいった。それは、血迷った獲物の所業のようなものだった。
少なくとも、追っ手はそう認識したらしい。
とどめの一撃を見舞おうと、三方からなる包囲陣は剣呑なまでの加速度をもって爆縮してゆく。
直接弾丸を撃ち込まれる――その一瞬前に、アスは加速釦に親指を押し込んだ。
鎖から解き放たれたように、戦闘機は速度を増す。今までの速度の制約を破ったためか、追っ手の三機はそれに反応しきれなかった。慌てて機首を右へ転じている。こちらを視界に納めようとする動きだった。
「こっちに来い……」
アスはつぶやきながら、一気に機体を上昇させる。
戦闘機の前方数百メートルのところには、茫漠たる無数の水滴の集まり――すなわち雲があった。戦闘機は少しも速度を落とすことなく、雲の中へ進入していった。

太陽光が、分厚い水の層にさえぎられる。
もともと薄暗く、遠くまでは見えにくい視界だった。雲のせいで、与えられる情報量がさらに減じていく。
しかも、悪条件はそれだけではない。
たちまち、激しい振動が戦闘機を襲った。機体が四散するほどの、地震のような揺れである。雲の中に存在する激しい気流にさらされて、通常のバランスを保っていられる飛行機など存在しないのだ。
しかし、その流れには一定の方向がある。すなわち、高気圧部から低気圧部へと上昇していく流れだった。
アスはその流れに逆らわず、機首を上方に固定する。再び加速に制約を課すが、それを補って余りある速力が生み出された。
異なる世界への昇華。それを目指して、戦闘機は無尽蔵の疾駆を機関から吐き出し続ける。
止まらず、また和らぎもしない振動に耐えながら、アスは操縦桿を握っていた。たとえ次の瞬間に暴風に砕かれることになろうと、今は手を離すことは許されない。そう自分に説くことしかできなかった。
精神的な圧迫はいや増すばかりだった。だが、追っ手もそう簡単に勝負を降りてはくれないらしい。三機は、こちらに続いて上昇してきている。
一方で、その距離は徐々に開いていた。
雲の中の空間とは、飛行路としては最悪のものだ。その中にいることに、抵抗なり躊躇があるのかもしれない。ほんの数秒前までの不気味な殺意が、追っ手の三機から消え失せていた。
アスは、戦闘機の切っ先を見つめる。そして、それが指し示す最後の薄い雲の層も。先にあるはずの透明な大気が、わずかな爽やかさを漂わせていた。雲から抜け出るのも近い。
翼がふっと軽くなる。水滴による抵抗がなくなったせいだった。
雲の上空に出たのだ。
そこでは、すでに太陽は没している。月と星のみが、かすかに輝

きを放っていた。そして、”鐘”と呼ばれる人造の惑星もそこから見ることができた。
戦闘機に乗っていれば、”鐘”の発する音は軽減される。それでも、完全に防ぎきれるわけではない。耳の穴深くまで侵入しようとする音に、アスは自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。
歯を食いしばり、脳が磨り潰す痛みを無理やり追い払う。レーダーの画面だけに、全神経を集中した。
赤い点が三つ、急速に上昇してくる。残り十秒ほどで、追っ手が雲の層を突き抜けることが読み取れた。
アスは操縦桿を急激に曲げた。機体は右に旋回する。限界まで深い角度での旋回だ。やがて、戦闘機の前後が百八十度入れ替わった。追っ手の出現を待ち構える形である。
アスは、レーダーを見やる。追っ手は変わらず上昇し続けていた。
こちらは、蜘蛛のように相手を待ち構えている。そのことが分かったとしても、もはや相手が逃げることは不可能だ。なぜなら、雲の中の上昇気流は、途中で振り切れるほど弱いものではないからだ。
アスはそのことを知っていた。次の攻撃で、必ず一機をしとめる――それが彼の狙いだった。
残り時間がほんの数秒となる。
アスは操縦桿に手をかけた。それに付属した射撃釦にも、指を添える。また、海のように広がる雲の、ある一定の領域のみを凝視した。
雲がかすかにうごめいた。意識を集中しなければ気づかないほど、ささいな変化である。それでも、今のアスには充分だった。
骨折するほど強く指を押し付け、同時に腕を前に突出す。
機体の中央から弾丸が迸った。小気味よい音が響く。それは、命を砕く無情な力そのものだった。微塵ほどの容赦もない。
水に泳ぐ魚のように、戦闘機自身も前方へ突き進んでいく。弾丸の発射源の移動速度は、そのまま弾丸自体の速度に加算され、凶暴なうなりが弾丸から沸き起こった。

そしてついに、追っ手の戦闘機が姿を現した。
雲の残滓を身にまとっている。卵から孵ったばかりの、鳥の雛を想像させる姿ではあった。
そのことを認識する直前か直後、アスの放った弾丸が敵の機体のほうへ吸い込まれた。
目標が見えないままの射撃だった。それにも関わらず、時間差を乗り越えて弾丸は命中したのだ。敵の機体後部に、無数の弾丸が次々と突き刺さる。
ちょうど、燃料の貯蔵部を撃ち抜いたらしい。蜂の巣になった部分から、瞬く間に火の手が上がる。
敵機は、精密な移動能力を失った。
姿勢と速度を潔く保ったまま、上昇に上昇を重ねる。炎と黒煙が、途切れることない尾を引いていた。にもかかわらず、撃墜機を包む炎は勢いを止めなかった。
全身を炎に包まれる直前に、機体はガラスのように爆散した。
金属の破片と、鼓膜がちぎれるような爆音を周囲に撒き散らしながら。
殺した敵を悼む余裕もない。
既に残りの二機が、雲の上に出現していた。それぞれ右方と左方に展開している。
二機がこちらに迫る前に、アスはそのままの速度で前進した。血眼になり、雲の層を眺め回す。下に降りるためには、雲の途切れ目を探す必要があった。
やがて、程近いところにそれが見つかる。アスは可能な限りの速度で、下界へ続く道を目指した。

海を臨む空道に復帰し、数分が経過する。新たに一万メートル以上の航行を重ねた。そのときまでに、追っ手の二機はこちらの追跡をあきらめていた。これ以上の損害を懸念してのことだろうか。それは知る由もなかった。

シトラは、自分の胸を軽く押さえた。
体の奥底の震えを、必死に抑制する。そのような症状が興るのも、シトラは仕方ないことと思った。一瞬後には死んでいるかもしれないという、極度の緊張状態に身を置くこと。それは、シトラにはない経験なのだから。猫に追い回されるネズミの気持ちが、シトラには分かった気がした。
心理状態が、身体にも影響を及ぼしている。心臓の動悸が、どうしても止まってくれない。また、いやな味のする唾液が、盛んに口内で分泌されていた。それは、嘔吐の典型的な前兆だった。狭い機内で楽になるわけにはいかないので、シトラは必死に唾液を飲み込む。
そして、恐る恐るアスに聞いてみる。
「逃げ切った、の？」
シトラは操縦席を覗き込んだ。
レーダー上の赤点が、円形画面の外縁部に移動していく。
戻ってくる様子は見られない。数秒の沈黙の後、アスは口を開いた。
「敵機、レーダーより消失。もう追っては来ないみたいだ」
「どうして？　最初はあんなに脱走者が憎いみたいだったけど」
「多分、状況が変わっていなければ、この辺りはもうすぐ帝国の勢力範囲に入るはずだ。一度通ってきたから、覚えてるんだ。あの居住区の人たちが出てくるには、ここは危険すぎる」
「そうなの。ああ、よかった」
シトラは言いながら、座席の背もたれに体を預けた。ようやく人心地がついた気がする。看護帽を脱ぎ捨て、脇に置いた。額にうっすらと沸いた自分の冷や汗を、手で拭い去る。
自分たちは、死線を潜り抜けた。それは信じられないような幸運だと、シトラは感じた。もっとも、運というよりはアスの技量によるところが大きいかもしれないが。
無遠慮を感じつつも、シトラは聞いた。

「でも、こんなに強いのにどうしてあなたは撃墜されたの？」
「確かにヘンだな。……けど、自分でもよく分からない。ただ、なんだか知らないけど今回は生き残れた。それだけだよ」
「ふうん……」
彼に分からないのなら、シトラに分かるはずもない。だが、分かることもあった。
（わたしは無関係な人を殺した。ううん、わたしが殺させたのね）
撃墜された戦闘機に乗っていた人は、居住区の兵士だろう。
シトラは、自分に構わなければ殺しはしないと、宣言した。それなのに、向こうが勝手に追跡して来て、先に発砲までしてきた。だから、殺されて当然だとも言える。
しかし、仮にそうだとしても、こちらの都合でひと一人の命を奪ったことに変わりはない。
（できるなら、誰も傷つけたくなかった。でも、しょうがないじゃない。そうしないと、わたしは帰れなかったんだもの……）
シトラは歯を食いしばった。誰に言い訳しているのか分からない。
（それに、わたしは自分で殺したんじゃない。アスに殺させた。彼は本当は、わたしの都合なんか関係ないのに）
操縦席を盗み見る。
何事もなかったかのように、アスは操縦を続けていた。心なしか疲れたようには見える。
だが、それだけだ。罪の意識を持っている様子は窺えない。
きっと、殺し殺されることが彼の――というより、兵士というものの日常なのかもしれない。彼はまだ少年とはいえ、立派な兵士である。成り行き上仕方なかったが、彼に汚れ仕事をさせてしまった。しかも、彼には関係のない理由で。
それは、とても恐ろしいことだった。
だが、考え方の違いだろうか。アスはそのようなことを省みる様子がない。戦うことが、当然自分の仕事だと思っているかもしれない。そこまでは分からなかったが。

（わたしが彼を巻き込んだんだから。いまさら言い訳なんてしちゃいけない。最初から、これはわたしのわがまま）

シトラは、アスに何か言うべきだと思った。しかし、何を言いたいのか分からなかった。

（感謝の言葉？　それはちょっと場違い、ていうか不謹慎だし……謝罪、はなんかウソ臭いし）

もっと時間がたてば、こんなことで悩んでいるのは馬鹿らしく感じるのかもしれない。それが分かっていても、肝心の答えを、シトラは見出せなかった。それを探り当てない限り、悩みは消えそうにない。

そのとき、シトラは言葉を記憶の底から掘り起こした。

（考えても仕方ない、か）

少年自身が発した言葉だった。そういう心境は、シトラにはいまいち理解できないものだった。そこまでシトラは、運命に対してドライな態度はとれない。

しかし、念頭に置いた意味が違うとしても、その言葉には真実の片鱗が感じられた。きっと、アスと同じ時間を、ほんのすこしながら共有したせいかもしれない。

ほんのすこしだけなら、そういう考えに妥協するのも悪くはない。

（なにか言うのは、野暮ってものかな。このまま黙ってればいいか……そうしよう）

人に迷惑をかけながら、何も言葉をかけないということになる。だが、それでよかった。ありきたりな感謝の言葉では、かえって彼の名誉に傷をつけるだろう。それに、人に迷惑をかけるというのも、親しみを表現する手の一つかもしれない――そうシトラは納得した。

「なあ、さっきから黙ってるけど、どうかしたの？」

片目だけこちらに向けて、アスは怪訝そうに言った。

「あ、ううん。なんでもない」

「そうか。ところで……」

彼はちょっと迷ったように、視線を下にずらした。が、結局口に出す。
「これから、君はどうするつもりなんだ？　どこか行くあてがあるのかい？」
「当て？　わたしは、故郷に帰って――」
「そこで暮らすっていうの？　でも、君は任務を放棄したスパイなんだろ。そこにいたら、すぐに見つかっちゃうんじゃないか」
「うーん」
シトラは軽く唸った。
（そういえばわたし、本当にどうするつもりだったんだろう。故郷に帰る事ばかり考えていたけど、その後のことなんて何も思いつかなかった）
首を捻って考える。
話が続かないので、とりあえずシトラは思いついたことから語った。
「私の家族は、もうそこにはいないの。ていっても、いなくなっちゃったのはずっと昔。だから家族の顔も思い出せないんだけど。結局、わたし頼る当てもないのね」
シトラは、かすかに笑った。
寂しさを誤魔化すための笑いだったのだが、そんなものを必要とするという事実そのものが、よりいっそう寂しさを増長してしまう。
「君の家族、亡くなったのかい」
「分からない。離れ離れにされて、わたしはすぐ工作員養成キャンプに放り込まれたそうだから。分からないの」
「そうだったのか」
感情が、空気を通って伝染する。
肉親を覚えていなくとも、故郷の景色だけはきわめて鮮明に思い出せた。
（悲しいって、思ってもいいよね……）
誰と一緒にいた記憶もない。一緒にいたといえるのは、ただ海と

風などの自然物だけだった。そんな記憶は、何も盛られていない器のような虚しさがある。
病院に居たときは、そこは確かに自分の家だと思い込むこともできた。親しかったり、気に入らなかったりした人も、いっぺんに思い出しきれないほどたくさんいた。フリュクテをはじめ、とくに懇意にしてくれた人たちは、本当に家族のようなものだった。
しかし、実際にはそうではありえない。シトラは結局、その人たちを偽り続けたのだ。そして、別れを告げることもできず去ってしまった。もう一度会うことがあるとして、彼らに許してもらえるだろうか。シトラには分からない。
そして今は――そんな偽りすら捨ててしまっている。
シトラは、胸に大穴が開いたような感覚に耐えた。そして、言い続ける。
「故郷の土を踏めさえすれば」
「うん？」
「……もうどうなってもいい、と思ってたかも。今までそんなの意識したことはなかったけど。今は、そう思う」
シトラは手を握り締めた。
「君が、そんなに故郷のことが好きだとは知らなかった」
思いつめたように、アスは戦闘機の速度計を凝視している。
具合でも悪いのかと思って、シトラは声をかけようとした。だが、アスに先を越される。
「シトラ、ちょっと提案があるんだけど」
「なに？」
「もし君がイヤでなければ、の話なんだけど――」
頭を掻きながら、アスは言葉を詰まらせる。いつも歯切れのよい彼にしては、珍しい行動だった。少なくとも、シトラはこういう彼を見たことがない。
やがてアスは、敵の弾丸を回避したとき以上の真剣な面持ちを見せた。そして告げる。

「よかったら、僕の故郷に来てみないか」
唐突な言葉に、シトラは面食らった。
「あなたの故郷に……」
アスは、すまなそうに視線をずらす。
「ああ、いや、君の故郷みたいに自然がきれいな所じゃない。小さい地方都市なんだ。どっちかというと、薄汚れたかんじのするところだけど」
「……えっと、そうじゃなくてさ」
頭のこんがらかりはいかんともし難い。なのでシトラは、説明を求めた。
「じゃあ、説明させてもらうと……ええと、僕が帝国に帰ったら、いちおう傷痍軍人ということになるんだ。敵地から脱出してきた訳だから。君みたいに、任務を放棄してきた訳じゃない」
アスは曖昧に微笑んだ。しかし、口元が引きつっているので、歯に挟まった食べ物を取ろうとしているかのように見えてしまう。
「任務を終えた軍人には、住むところが保障されるんだ。まあ、土地がもらえるわけじゃなくて、安く貸してもらえるだけなんだけどね。本当に自分の所有にしたければ、もっとお金を払わないといけない」
「ほんとう？」
「うん、それは確かだよ。兵士になりたいって人が少ないらしくて、恩給はけっこう奮発してる。それが目当てで軍人になったんだから」
そのとき、戦闘機のバランスが崩れた。
座席の底が大きく揺れ、シトラはガラスに接吻しそうになる。
元の状態に直そうと、アスは振り返った。操縦のほうに集中している。が、そう見えつつも、彼は会話を続けた。
「そんなわけで、一応暮らしてはいけるはずなんだ。だから、僕と一緒に来ないか？」
「あなたと？」

シトラは息を呑んだ。それが、あまりにも思いがけない申し出だったからだ。答えられないでいると、アスはさらに告げる。いつになく張り詰めた声音だった。
「ああ……まだ君に死んでもらいたくはない」
「そう」
シトラは自らの強運に、半ば呆れつつも感心した。
人とのつながりがもう絶たれてしまった――そうなったと思った。しかしそのすぐあとに、またこうして新しい関係が生じたのだから。
「それもいいかもね。ただ――」
シトラは言いかけて、中断した。
透明な水に浸されたように、シトラはさまざまなものをよく見ることができた。他人のものをみるかのように、自分の過去が客観的に明らかにされる。
自分が泣きながら追い求めたもの。まだきちんとした形にもなっていない。そのごく一部分、核となるものだけがはかなく宙に浮いている。
（わたしが欲しかったもの……）
ほんとうに幸福な人は、そもそもの最初からそれを持っているのかもしれなった。疑いようもなく、確固とした地盤を伴って。
シトラにはそんなものは与えられていない。
（だったらこれからも、それを欲しがってもいいよね）
確かめる相手もいない、なんと壊れやすい言葉だろう。それでも、信じるしかないのだとシトラは悟った。
自分の好きなようにすればいい。そんな自分の内なる声に、シトラは従った。
「一つ約束して欲しいの。身を隠して移動できる余裕ができたら、私はどうあっても故郷に行かないといけない。それまでいいなら」
「ああ」
その時、またアスはこちらを向いた。
彼はさっぱりした微笑みをみせていた。彼と出会ってから日は浅

いせいか、彼がこんな顔をできることも知らなかった。
「まあ、その時は僕も着いて行けばいいよ。考えてみたら、僕にだってもう身内は君しかいないんだから。それに僕は、シトラほど故郷に執着していないしね」
シトラははっとした。あることに、たった今気がついたのだ。それは、シトラとアスの距離がとても小さいということだった。戦闘機が狭いせいである。いちいち振り返らずとも、話しは聞こえるくらいだった。だが、実際は振り返っている彼の顔は、驚くほど近い。
彼の言葉を認めるように、シトラも微笑み返した。
「うん。アスのお好きにどうぞ」
二人は、声をあげて笑いを共有した。それはまだ、控えめなものに過ぎなかったが。
（いまは、これでいいの）
シトラはそう言い聞かせた。乳母のように、他の誰かを丁寧に受け入れたかったのだ。
それでいて、他の思いもある。シトラの体に触れたアスの皮膚から、それが伝わってきた。血管を通って、腕へ、上半身へ、そして全身へとそれが巡っていく。
誰かの腕に抱かれる――そんなときに生まれてくるらしい。ゆりかごに寝ているかのような、安らかな気持ちが。

エピローグ

夜の間だけは、あの”鐘”はやはり姿を見せている。
帝国の兵器なのだから、”鐘”の凶音が帝国領内に害を及ぼすことはない。それが分かっていても、シトラは平静ではいられなかった。
それでも外に出てきたのは、したいことがあるからだった。

海岸近くの高台には、柵で囲まれた一区画がある。シトラはそこを訪れていた。
何枚も重ねた外套を、樹に引っ掛けないように注意する。
少しの間、立ち止まっていた。だが、再び歩き出す。
故人の墓を定期的に訪れるという習俗は、シトラには馴染みの薄いものではあった。しかし、そういうことをする気持ちは、シトラにもよく分かる。今となっては。
そして、自分もそれをしたいと思ったのだ。自分のためと、そしてなにより、故人が望むことでもあろうから。
ほどなく、目的の石碑を見つける。シトラは何度となく通った小道を、足音も感じないほど静かに歩んだ。
石碑にもまた、数え切れないくらい口にした名前が刻まれている。
『アス一等空士　没』
荷物を置いてから、シトラはアスの墓の前にしゃがみこんだ。布で石碑の汚れをふき取る。
（まだ、こんなに寒いままなのね。あなたは、外に出るなと言ってくれたけど……）
心の中で、シトラはアスに話しかけた。語りかけるように、石碑をじっと見つめる。
アスは結局、病院で撃墜されたときの傷が原因で亡くなった。二人がシトラの故郷にたどり着いてから、まもなくのことだった。

ここにくれば、あの安らかな気持ちを思い出すことができる。アスが生きていたときに、シトラにくれた物だった。だからシトラは、ここに通うのを止めなかった。

「あのね。ちょっとニュースがあるの――」

途端に、耳の先を切り取られるような痛みが走った。あまりにも厳しい寒風が、冬中吹き続けている。今も、その風は盛んに吹いていた。薄暗い墓地のなかで、風は表土をえぐり取っては去っていく。枯葉が幾重にも舞い散り、うち数枚がシトラの体を擦過した。

しゃがんだまま、シトラは自分の体を外套ごと抱いた。そうして、寒さに耐えればよかった。卵のように、蕾のように。

「わたしたちがいた居住区は、もうなくなってしまったんだって」

あまりに風の勢いが激しく、シトラは目を半分閉じた。睫毛を通して、石碑への視線を送り続ける。まだ、話すことは終わりはしない。

「二十年前の、わたしの故郷と同じで……”鐘”が、あの居住区を滅ぼしてしまったのだって」

風に圧迫され、シトラは体の均衡を失した。後ろに傾き、尻餅をつく。荷物が飛ばないように抑えつつ、シトラは言葉を紡ぐ。

体と違って、心は幾分の揺らぎもなかった。

「戦争が終わったら、また行けたかもしれないのにね」

激しい風にかき消されないよう、シトラはささやき続ける。そうして少し経ってから、シトラはその場を離れた。

眼下には、風に荒れ狂う海がある。

平らな岩の上で、シトラは立っていた。荷物のなかから、目当てのものを探り出す。

それは、長年持ち続けたスケッチブックだった。

だんだんと緩くなる風に乗じて、紙をめくっていく。そして、ある一ページをシトラは見つけた。

そこに描かれているのは、一人の少女だった。片足を投げ出して、地面に座っている。挑むような生意気な眼差しと、愛嬌のある口元

が、違和感なく共存していた。
それは、親友だったフリュクテを描いたものだった。もともと、彼女にプレゼントするつもりで描いていた。が、渡す前に同じものをもう一枚描き、自分用にシトラが残しておいたのだ。
その絵を眺めたまま、シトラは数分じっとしていた。
目的がないわけではない。彼女は、ひたすらに待ち続ける。
何十分もの間、シトラはそうしていた。すると、ついに空が白み始める。”鐘”は、水平線の向こう側に没して見えなくなった。波が、砂浜が、丘が、森が、光に照らされ、輪郭を確かなものとしていく。
もうすぐ、夜明が訪れる。
しかし、シトラが待っていたものは、ついにやって来なかった。
（わたしは、悲しくならないのかな）
シトラは自問した。スケッチブックを胸に引き寄せ、さらに問い続ける。
（こんなに多くを失ったのに）
居住区から脱出したときと同じで、彼女はもはや過去に何物も所有していなかった。
故郷を失い、居場所を捨てて。親友からも、伴侶からも取り残された。昔の自分ならきっと、希望を失ってしまっただろう。そう思えるほどの、心臓に突き刺さる衝撃をシトラは受け止めてしまった。
それでも、湧き上がる感情がない。まったくないのだ。
（わたしは冷酷になった？　……いいえ、違う。そんなことじゃない）
荒々しい風は、もはや完全に止まっていた。代わりに、ぬるい温度を含んだ微風が吹き始める。海の向こうから吹く西の風。それは、冬の終わりが近いことを知らせる風だった。
（今までのわたしのことで、わたしはもう悩んだりできない。悩まなくてもいいんだ。わたしは、これからのわたしに満足してる）
シトラは瞳を閉じた。嗅いだことのない潮の香り、感じたことの

ない日の光が、自分だけの暗闇の中で感覚の軌跡を刻む。
たった一つ忘れることのなかった、故郷の海。それは一筋の航跡も残さずに、まぶたの裏から消え去っていた。あれほど夢に見続け、一瞬前まで実際に見ていたはずの、あの海が。
見ることのできるものは、何一つ映じていない。
必要がなくなったから、それは消えてしまった。ごく簡単なことだった。
もう瞳を閉じずともよい。発見した新たな真理に導かれ、シトラは瞳を開けた。
「フリュクテ、アス――あなたたちは知ってるかな」
少し前までの荒々しさは嘘のように消え去り――朝霧と朝日だけが、海を穏やかに演出していた。波がささやかに渦巻いては霧散し、歌姫のようにたおやかな円舞を舞っている。
シトラの見たことのない海が、視界から溢れるばかりに広がっている。これが自然に生じた景色だとは、とても思えない。誰かが作ったように、精巧で可憐だった。
そして、また。
空はまだ、薄い闇の帳に覆われている。太陽もまだ、昇ってはいない。しかし、紅の光が徐々に強まっていく。仔細に観察しても、それとは分からないほどゆっくりだったが。
もうすぐ見ることができるだろう。破壊ではなく、むしろまったく別の始まりを告げる鐘の姿を。
「わたし、とても面白いことを見つけたの。聞いてくれる？」
他人をいたわるように、シトラは自分の胸にそっと触れた。
もう故郷ではなくなった海。
初めての時として、シトラはそれを見ている。そこは、新たな生活の場となって、シトラを祝福してくれているようだった。
この海のように、何度でも自分で作り直していく。そんな柔軟な力が、自分の内に芽吹いていた。
「目を閉じるとね……人は、自分の未来を見ることができるんで

すって」
彼女の言葉は、祈りでも願いでもない。ただ愚直な意思を言葉として、大気に乗せて広げていく。綿毛のように。
体に宿った、まったく新しい未来を意識しながら――その手でいつまでも、シトラは春風に触れ続けていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7484k/

瞳の開く時

2010年10月10日21時04分発行